始まりと終わりの子守唄

Ceez

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
始まりと終わりの子守唄

【Ｎコード】
Ｎ６６９０Ｔ

【作者名】
Ｃｅｅｚ

【あらすじ】
難病の治療法を待つ為コールドスリープに入ったあたしこと柚（ゆ）木果狩遥（ずきかがりはるか）がある日突然目覚めてしまったら、枕元には可愛い赤ん坊が二人！　世界は裏返しにはなってるわ、人外種族も増えてるわ、オマケにあたしまで不老不死になってるわ！　どーなってんの、これ！？（見切り発車の為何にも考えてません）

プロローグ

そは始まりの種族
そして汝は全ての起源を統べる者なり

そは終わりの種族
そして汝は全ての終焉を司る者なり

対の種族はお互いを見詰め合う鏡の如く、反発する磁力の如く、
支え、対立し、高めあって行く

双方を纏め導く神子（みこ）の存在を軸として

……などと言う上の地の文とは全く関係の無い、青く青く何処までも青い地球の空にある日亀裂が入った。

当然目ざとい暇人が空を見ていてソレに気づき、あろう事か珍光景として動画サイトに投稿した。

そんな非常識な事がある訳無いと空を見上げた人々も、その亀裂に気付いて騒然となった。

そして当然のように何処から出ているかも分からぬ予算が組まれ、専門家チームが集められてその観測に没頭した。

しばらく経ってからのその専門家チームからのコメント、

――――『亀裂が大きくなっている』

に、世界中の終末信論者が沸いた。騒いだ。お祭りだ！！

それに便乗した一部の過激派が大騒ぎを敢行する中、亀裂が砕け散った。

ぱりーん！　と空の一部に割れた窓ガラスのように大穴が空き、そこから緑色（エメラルドグリーン）の空が姿を現した。

無論姿を現したのはソレだけではない。空の一面をごっそり削り取り向こう側が姿を現すと同時に、人の様で人で無い者達も姿を現した。

剣や槍を持ち鎧を身に纏った者達は、人間の有無など関係なく二つの陣営に分かれ互いに争い合っていた。

双方の姿を見上げた人間達は希望と絶望が綯交ぜになった表情で呟いた。

「終末（ハルマゲドン）の戦争だ……」

空を飛び交い争う者達の背にははっきりと人間達と違う特徴があった。

黒い羽根か、白い翼かが……。

深刻な世界情勢とは裏腹に、ある施設に小さな小さな二つの影が落ちた。その二つは空が割れると同時に此方の世界に落ちてきたのだが、二つの陣営の戦の印象が強烈過ぎた為、誰にも気づかれる事は無かった。

その二つの影は、ある私有地の片隅にひっそりと造られたこじんまりとしたドーム状の建物に舞い降りた。舞い降りたと称するが、そんな生易しい表現で通じる物ではなく、盛大に天井をぶち抜いて中に転がり込んだ。建造物のガレキが散乱する中、「いやーまいったね、ハッハッハー」とでも言うような気安さで頭を掻く片方。「だめじゃん」と言うばかりな突っ込みを入れる片方。

正確に言おう。両方ともその姿は生後一ヶ月位の赤ん坊の姿をしていた。結果的に天井をぶち抜いたのは片方が二メートルはある黒い翼を背から生やした黒髪黒目の赤ん坊。当然の如く全裸だが男性器のシンボルは無し。糸目で突っ込みを入れたのは金髪碧眼の赤ん坊、背負うは巨大な右に同じく白い翼。こちらもシンボルは持っていない。

二人は狭い室内にも拘らず翼をいっぱいに広げると、ふわりと浮き上がった。翼は当然の如く室内の直径よりも大きいが、半分以上が壁をすり抜け外へ露出してしまっている。そんな摩訶不思議な現象を気にする者はここにはいないので、二人の赤ん坊は薄暗い赤色

非常灯に照らされた室内を見渡してひとつの置物を見つけた。そもそもこのドーム状の建物はその置物を保存する為に建っていて、まさか天井ぶち抜く侵入者がいるなんて誰も考えない。
その置物は上半分を透明な物質で覆われた、平たく言うとカプセルであった。中には特殊なジェルが満たされていて、中には女性が一人。表面は結露した水滴が、更に内部の温度が尋常では無い寒さの為凍結している。二人の赤ん坊は無防備にソレに近付き、てしてしと表面を叩く。熱さ寒さを感じないのかきゅっきゅっとガラスの表面を擦って霜を拭き取ると、中に入っている女性の顔を覗き込んだ。ショートボブの決して美女とも美少女とも言えない平凡な容姿の顔をじっと見て、無邪気な笑い声を上げた。

飽きないのか暫くじっと見つめていた二人は顔を見合わせて頷くと、カプセルの表面に手を付いて燃え上がった。燃え上がるといっても炎のような揺らめきが二人から発せられ、間にあるカプセルを包み込んで部屋中を所狭しと暴れ回った。一分か五分か室内をオレンジ色に満たした炎は消え去り、ついでにドームの壁も跡形も無く、ガレキも蒸発。しかし冷たい床には全裸の少女だけが残っていた。
少女を挟みこむような宙空に二人の赤ん坊が未だに浮いていて、互いの掌を向けていた。念じるように眉をひそめる二人の間に蛍の灯火が光ると、瞬く間に大きくなり何かの形を取る。やがて淡い煌きが硬質の質感に変わり、小さな水差しがそこに現れた。白い翼の赤ん坊がその水差しを手に取ると、黒い翼の赤ん坊はおもむろに女性の口に手を突っ込み下顎を掴んで下に引っ張った。ゴギュッ！と音がして不自然な形で開口する、そこへ水差しを突き刺した白い翼の赤ん坊。乱暴を通り越して両方ともムチャクチャである。

気道か食道かも分からぬ所に注ぎ込まれる水差しの中の液体。中が空っぽになると水差しは輪郭を滲ませて消えてしまった。二人は女性の顎を元に戻すと息の合った欠伸をしたのち、健やかな笑顔を

浮かべ体を丸くさせて女性の腹や胸の上ですやすやと眠りについた。

一連の騒動が集結してから女性が目覚めたのはその十分後。ついでにドームに異常を感じた私有地の者が駆けつけて来て、夕暮れの空に甲高い悲鳴があがった。

おはようございます

「し、信じられん。あれほど異常だらけだったカルテと比較しても、何の問題も無くなっている……」
「異常を聞いているのではありません。健康であれば問題無いではありませんか」

二枚のカルテを驚愕した表情で見つめ直す医者と、淡々とした声で怒っているらしいお婆さんの掛け合いを、あたしはぼけーっと見つめていた。

目が覚めたら全裸で外に居て、大挙して押し寄せて来た黒服の人達と顔合わせしてしまったあたしがとんでもない悲鳴を上げてしまったのは、当然の権利だよね！　ううっ、見られたー。もうお嫁に行けない……。

その後にわらわらと湧いたメイドさんに捕らえられたあたしは病院服を着せられ、黒塗りの車にお婆さんと同乗して病院へ直行。各種検査を一通り受けて今に至る、と。

色々と疑問は尽きないんだけど、とりあえず最大の質問は、あたしの病院服の肩を片手で摘み、黒白の翼を広げて空中に浮かぶ二人の赤ん坊でしょう。しかもこの診察室に来るまで出会った人達、患者とか看護婦とかがね。ぎょっとした顔でぶるぶる首を振ると、見なかった事にしようとかいう風にスタスタと早足で去って行った……。

ちょっとおおおっ！？　誰かこの子達について相談させてよおおお！

んーむにゅ……。とか呟いた片方、金髪の子がちっちゃな手で肩を掴んでいた所からよじよじと登る。この場合は下る？　んで、肩から移動してあたしの胸の中にすっぽり収まる。すると片方だけでもあたしの身長を遥かに越える大きさを持つ翼がしゅるしゅると縮んだ。姿相応の小ささになった翼がちんまりと自己主張する。今度はもう片方の黒翼を持つ子も同じ様に移動して左胸側に収まる。

うおーかわええ～、癒やされるぅ～。……じゃなくてっ！

は、危ない危ない危うくこの自然な可愛さにヤられる所だった。気が付くと医者とお婆さんが目を丸くしてこっちを凝視していた。違います違いますよ、二人ともあたしの子じゃないんですよ。つか伴侶を持った覚えもなければ、翼を持つような子供を産んだ覚えもない。ついさっきまでコールドスリープ状態だったあたしに心当たりなんかないってーの！

「はい、姉さん。もうお医者様は用がないそうですから行きましょう」

「は、はぁ……」

スタスタとやって来たお婆さんがあたしの腕を取って椅子から立たせると、ぐいぐい引っ張る。ちょっ、このお婆さんパワフル過ぎる。そのままあたしを診察室から少し離れた病室まで連れて行く。

疑問その二。さっきからこのお婆さん、あたしを『姉さん』と呼ぶのだ。その都度、事情を聞こうとするんだけど、怖い笑顔で口を封じられてしまうんだ。紫色の着物に白髪混じりの結った髪、柔和な顔立ちは優しいよりは凛々しいと言う印象に見える。似ている気はするけど、記憶にあるあたしの祖母とは全然別人だし、なんでそんな呼び方をするんだろう？

押し込まれた部屋には医療用のベッドは無く、ガラーンとした中に居たのは数人のメイドさんだ。わーっとあたしに群がったメイドさんは病院服を脱がすと着物を取り出し、テキパキと着付けを済ませていく。ちなみに脱いだ病院服には二人の子供がくっ付いたままで、翼を広げてもいないのにプカプカ浮いている。一反木綿みたい。しかし良く寝る赤ん坊だなあ、あたしが目覚めてからずっと寝てばかりいるけれど、御両親は心配していないんだろーか？

「あれ、この着物……？」

「姉さんが気に入ってた着物ですよ。さあ、時間がありませんからさっさと行きましょう」

紫陽花染めの薄い紫の着物はコールドスリープに入る前に祖母から送られた物だ。お婆さんに引っ張られる前に病院服から赤ん坊を引き離し、胸に抱え直す。ジト目であたしを見つめるお婆さん。あたしが悪いんかっ。

再び黒塗りの車に押し込まれて、慌ただしさも抜けたあたしはやっと疑問点が聞きだせると思った。隣に座っていたお婆さんが、「さあ、何でも聞いて下さい」と言う顔をしていたからだ。何故かこのお婆さんの表情だけは読みやすい。

「えーと、それではお婆さんに聞きたい事が山積みなんですけれど……」

「まあ、お婆さんだなんて他人行儀な呼び方は止めて下さい。昔と同じく呼び捨てにしてくださって結構ですよ。姉さん」

「いやいやいやいや流石に倍の倍以上歳の離れたお婆さんを呼び捨てなんて失礼でしょう。……ん？　昔みたいに？」

あたしが首を捻ってると、うっかりしてたと呟いたお婆さんが、

苦笑しながら自分の額をぺしんと叩いた。ん～、この仕草は覚えがあるわ。ええと、確かあたしの妹が良くやっていた……。

「ご自分の名前と年齢は覚えておいでですか姉さん？　今更ですけど自己紹介と参りましょう」

「ええと、はい。柚木果狩（ゆずきかがり）遥（はるか）、十七歳です。宜しくお願いします」

「これはご丁寧にどうも。柚木果狩（ゆずきかがり）　沙霧（さぎり）、六十六歳です」

「ん？　沙霧？」

「ええ、昔みたいにさーちゃんとでも。呼びやすいようにフランクな呼び方で結構ですよ」

悪戯が成功して満足した表情で沙霧と名乗ったお婆さんが……、

ええっ！　沙霧っ！？

「沙霧？　沙霧ってさぎり？　さーちゃん！？」

「ええ、そして姉さんは数え年で六十七歳。つまりコールドスリープに入ってから五十年も経っているわ」

……さん、はいっ

「えええええええええっ！？！」

初めまして

このお婆さんはやはりあたしの妹の沙霧であるらしい。二人でしか知り得ないマル秘情報をいっぱい知っていた、主にあたしの心痛のネタを……。他にも五十年の間に何の変化があっただの、最近の情勢だのを色々教えてくれた。

あたしこと柚木果狩遥は後天的な遺伝子障害（と言う説明だった）の為、中学に上がったばかりの頃からやたらと疲れやすくなり。酷い時には電池の切れた玩具のように、日常生活の中で倒れる事が多々あるようになった。もう最終的には睡眠時間が一日十八時間とかの猫生活に。医者も「最善を尽くします」しか言わなくなったので、その時の当主だった祖母の鶴の一声で、あたしは治療法を待つ為に延々と眠る羽目になりました。

でも、こうやって起きれてるって事は治療法が出来たのかなあ？
気になったあたしは沙霧に聞いてみた。

「ね、ねえ、さーちゃん。あたしがこうやって起きてるってのはさー」
「ええ、残念ながら。姉さんの治療法はまだ確立されておりません」
「……はい？　え、じゃあ何であたし、ここにこうしているの？
いやいや待てマテ、もしかしてこれは夢？」
「落ち着いて下さい姉さん。順を追って説明しますから。ついでにその赤ん坊の事も」

そう言って説明されたのは次元の壁をぶち破って現れた、別次元の存在の人達だった。その人達は暫く人類の目の前で戦いをしていて、それを止めたと思ったら人類にコンタクトを求めて来たのだとか。

で、政府とかの国同士の会話は割と友好に済んで、問題になったのが……。

「この子達？」

「はい。信じられないのですが、どうやら崇め奉(たてまつ)られるような存在らしいのですよ」

「だったら早い所、あたしから引き離して会わせてあげれば良いんじゃないの？　ほら、検査を受けている間だって一日千秋の思いだっただろうし」

「出来ればもうやっています」

呑気なあたしの発言に沙霧はピシャリと言い切った。検査で病院を歩き回っている最中にも、柚木果狩家のＳＰさん達が果敢に挑戦していたらしいんだ。でも、近寄るだけならまだしもあたしから引き離そうとすると、掴む事すら出来ないんだって。「コノヤロウ」とか思ってアタックした人は、物凄い反発を受けて弾き飛ばされちゃったんだとか。道理で後ろから凄い音が聞こえ来たり、やたらと黒服の人達が疲弊してた訳だ。

凄い音に後ろを気にしなかったのは薄情とか言わないように。柚木果(ウチ)狩家は後ろ暗い部分がある大きくて古い家だから、ＳＰが付けられている時の対応マニュアルとかあるのよ、色々。言ってて悲しくなってきたなあ、まったく。

「じゃあ直接届けてあげるしかないんじゃない？」

「この車がどこに向かっていると思っているとお思いですか。これ

からあちらの代表者と歓談の場が設けてあるんですよ」
「……あたしも一緒に？」
「その子達が姉さんから離れない限り、当たり前じゃありませんか」

そりゃそうだ。
代表者って事はお偉方と会うのかー。えーと、えーと……。いかん、対応の仕方とかさっぱり忘れているね、うん。一族の中だと落ち零れだからなー、あたし。成績も中の下くらいだし、容姿も平凡だし、運動も病気のせいで出来なかったし。
そんなあたしが分家にも養子に出されず、本家で悠々と過ごしていられたのは祖母のお陰だ。若い頃から霊感に長けていたと言う祖母は、あたしが生まれた時に「この子は将来とんでもない事になる」と言ったらしく。その予言のお陰で本家での生存を許されていると言う訳です、ハイ。

なんと言いますか、幼い頃に祖母から聞いた話だと、柚木果狩の一族に生まれた者は優秀な者が多く、そんな中で時折祖母みたいに妙な能力を持った子供が産まれてくるらしい。でもあたし自身何かの能力を持っている自覚も無く、妹は優秀だったし、両親には嫌みを言われたし、肩身が狭かったのも確かだ。
それでも祖母のお陰で病気の事で医者に匙投げられても、そのまま見放されずにコールドスリープなんて処置を取って貰えただけでも幸運なんだろう。でなきゃ今この場で五十年も時を越えて沙霧と会話が交わせるなんて無かったし。

「そういえば御婆様は？」
「もうとっくにお亡くなりになられていますよ。私達の両親も私が当主を受け継いだ頃に亡くなりました。今度お墓参りに行きましょう」
「うん、そうだね」

どちらかともなく車内がしんみりする。腕の中の赤ん坊達が唐突にむにゅむにゅ言いながら身じろぎしたので、少しずらして抱え直す。安心したのか、体を丸めてまた静かに寝息を立て始めた。

「未婚の母と言った感じですね。昔から小さい子に懐かれる癖は変わらないようで」

「癖って言うのかなこれ……？　昔面倒見て上げた子達って、どうしてる？」

「皆それぞれ分家を纏める長老格になっていますよ。姉さんが目覚めたと聞いて、薬師寺家の蓉子が会いたがっていました。勿論、姉さんより遥かに年を食っていますが」

「蓉子ちゃんがかー。会う会う、コレが終わったら会うよ。美人さんになったのかなー」

「もはや美人を通り越していますけれどね……」

苦笑して「変わらない」と呟いた沙霧と顔を見合わせて笑い合う。

車が途端にゆっくりとした動きになって、カーブを曲がり段差を越えて、静かに止まった。これは何処か目的地に付いたんだなーと分かる。外から運転手さんがドアを開けてくれて、両手が塞がっているあたしは沙霧の手も借りて車から降りた。目の前に広がったのは綺麗な日本庭園を持つ一軒屋、の様相を呈した昔にも何度か見た事のある料亭だった。五十年経っても続いていたのねー。築何年経っている事やら……。

入り口で女将さんに「ようこそお越しやす」と挨拶されてから中へ案内して貰う。あたしが抱いている赤ん坊二人に目を丸くしたけれど、ほんのちょっとで直ぐにこやかな表情に戻る。女将の鏡だね～。「お相手の方もお待ちです」と通された座敷にその人達はいた。

片や、パンク系のテーラードジャケットやらレザーパンツやらに身を包み、座敷なのに土足で胡坐を掻いた真っ赤な髪のワイルド系白人的イケメン。やや雰囲気がおじさん臭い。お猪口を掲げながら「よう！　先にやらして貰ってるぜ」と声を掛けてきた。それだけなら行儀の悪い人にしか見えないが、背中には巨大な黒い翼が十二枚も生えていた。

もう片方は鈴風の鳴りそうな雰囲気の、煌びやかな印象を持つ短い金の髪の北欧系イケメンお兄さん。白く輝く法衣と言うべきな衣装を身に纏い静かに正座している。こちらに目を向けると「ああ、神子を連れてきてくれたのですね」と眩しい位の控えめな笑みをうかべた。こちらも背中からは白い翼が十二枚も生えている。

ああ、たしかにこの子達の身内ですね、これは。

変わりました

「俺は終族(しゅうぞく)の代表でサタンと言う。宜しく頼まァ」
「私は始族(しぞく)の代表でルシフェルと申します。以後宜しくお願いします」
「柚木果狩遥(ゆずきかがりはるか)です、宜しくお願い致します」

赤毛でワイルドなお兄さんはサタンと名乗り、優しそうだけどちょっと堅物っぽいお兄さんはルシフェルと名乗った。赤ん坊を抱えているので不作法になっちゃうけど、あたしも自己紹介で軽く頭を下げた。沙霧はあたしを連れて来ただけで、別室に下がるそうだ。なんでも色々外に漏れるとマズい話とかがあるらしい。

「先ずはウチの坊(ボ)ンが世話になったな。礼は言っておくぜ」
「始族からもお礼を申し上げます。我等が神子が手を掛けさせてしまったようで申し訳ありません」

もんの凄い対照的な二人だなあ、この人達。サタンさんは喋っていても熱燗傾けているし、ルシフェルさんはお膳を出されているにも関わらず見向きもしてない。それにしても迎えってお兄さん達だけなのか？

「あのー？　この子達って御両親はいらっしゃらないのですか？」

二人は目を丸くしてから、納得するように苦笑した。サタンさんが頭をガリガリ掻きながら説明してくれる。

「ああ、わりぃわりぃ。そうかこっちの人間には馴染みねぇよな。

坊ン達はな、厳密には親とかはいねえんだわ」
「神子様達は我等始族とサタン等終族の象徴とも言えるべき存在です。その寿命は永遠に続き、絶えるなどと言う事は有り得ません。只、時折古い肉体を捨て、新しい心身となって生まれ変わるのです」

「ええと、じゃあこの子達、赤ん坊だけど成人なんですかー」
「見た目だけはな。中身は数億紀元以上の知識や経験が詰まった至上の存在だぜ。ちょっとでも育て方間違えると、こんな星なんざァ……ボンッ！　と往くぜ」
「えええっ！？」
「中身はそうだとしても心身、性格や心の在り方等は無に返されてしまいますから。また我等で一から育て上げる必要があります。その相談をしている最中に下部の方で諍(いさか)いになり、全体的な戦闘に勃発したのはお恥ずかしいとしか言えません」
「じゃあ次元の壁抜いたって言うのは、教育方針の行き違い？」
「そうなりますね」
「すまん」

涼しい顔で流すルシフェルさんと顔の前で手を立てて謝るサタンさん。義理堅いのかそうでないのか微妙な所。だからと言って、教育方針の行き違いから戦争で壁をぶち抜くって、安普請のアパートか！　言い方がすっげー軽すぎる……。

不意に腕の中の赤ん坊がふわりと浮かび上がって、サタンさんとルシフェルさんの方へ空中を移動する。二人の腕に収まった赤ん坊を診ているようなんだけど、サタンさん？　足持ってひっくり返すのはどうかと思います。びっくりしたあたしは、つい攫うようにサタンさんから赤ん坊を引ったくってしまう。

「何してるんです！　可哀想じゃないですか！」

「いやこれがふつーの扱い方で、毎度の事だぜ。なあ？」
「そんな育て方をしてるから、終族の神子は毎回毎回粗野になるんですよ。偶には育児係を替えたら如何ですか」
「おー、そう来るか。しかしなあ、ウチの連中にはお前等ントコみたいな繊細な奴らなんかおらんしなあ……」

お酒をぐいーっと呑みながら彷徨うサタンさんの目が私で停止する。……超絶に嫌な予感がするんだけど。

「そか、だったら嬢ちゃん。アンタが育ててみねぇか？」
「うそおおぉおおっ！」

うわやっぱりこっち来た！　一族の未来を左右する子供を一介の女子学生に任せるなんて正気かっ！？

「何を考えているんですかサタン！　今後も我等の行く末を左右するんですよ！」

そだそだ、もっと言ってやって下さい、ルシフェルさん。

「何言ってんだルシフェル。偶には俺達の常識から離れた育て方をして貰えりゃあ、俺らの未来もまた違った明るいものになるってえ寸法よぉ」
「……成る程、そう言った捉え方もありますね」

うわー、論破されてどうするんですか。もっと食い下がったらどうなんですっ！？

「それに、普通の人間が此処まで神子に接していて何の影響も受けないと言うのは不自然です」

「そうだなァ、さっきからそこが気になってたんだが。嬢ちゃん、アンタ何モンだ？」
「ええと、たぶんふつーの人間かと思います、けど……。ん？」

腕の中で赤ん坊が身じろぎしたので見下ろしたあたしの視線と、ぱっちり開いた黒瞳とがぴったり合う。無言無表情でキョトンとしていた終族の赤ん坊はにっこりと笑うと、背中の黒翼を広げてぶわっと風を巻き上げながら、あたしの腕の中から飛び上がった。

「おう、起きたか坊ン」
「此方も目覚めたようですね」

ルシフェルさんの腕からも金髪の赤ん坊が浮かび上がって滞空する。二人の頭上で合流した赤ん坊は、うー、とか、あぶー、とか言いながら手を叩きあたしを指差す。いや、なんか会話みたいに見えているんだけど。ルシフェルさんの顔色が劇的に青ざめているんだけど。

「ぶっ……ぶわはははははっ！　す、すげーぜ坊ン！　あっははははははっ、ひーひー、ぶわはははははは、は、腹痛ェッ、うわはははははっ……」

いきなりサタンさんが笑い出した。畳に転がって息も絶え絶えになって尚、笑いが収まらないサタンさん。何がそんなに可笑しいんだろう？　逆に全身真っ白から真っ青に変色したルシフェルさん。服まで変わるのか、器用ですね。

赤ん坊二人はあたしの方に飛んでくると、終族の子が頭の上に乗

っかって、始族の子が膝の上にポテンと落ちてくる。着物の帯を掴むと「あーうー」と笑顔をあたしに向けてきた。

「ん？　流石に言葉は通じないなあ。あ、こら！　キミは頭の上を這い回らないで！　簪（かんざし）とかあるから危ないでしょ」

あ、そうだ。名前あるのかな？　呼び名とかスンゴイ長かったりするのかな。あと服もないと裸じゃあ可哀想だよね。

「あの、この子達のな、……まえ……」

顔を上げたら目と鼻の先にお二人の顔が！　うわー近い近い！　離れて、はーなーれーてえー！

「とりあえずハルカっつったか？　最初に誤っておく、スマン」

「はいぃィ？」

「謝って済む問題ではありませんが、神子達が懐いているのでしたら育児係としては、申し分のない人材でしょう」

あたしの肩に両側からポンと手を置いて。なんとなく、昔の主治医の人が「最善を尽くします」と言ったシュチエーションそっくりだ。え？　ここあたし諦めるしかない場面？

「え、えーと、は、話が見えません……」

「なんでも坊ン達がお前さんを目覚めさせるのに神の種酒（ソーマ）を飲ませたらしくてな」

「我等始族や終族よりも貴女の方が神子達に近い存在になっています」

「そ、そーまって何ですか？」

あたしの疑問に二人のお兄さんが顔を見合わせて頷く。答えてくれたのはニンマリとした笑みを浮かべたサタンさんだった。

「手っ取り早く言っちまえば、……ハルカ、お前さんは不老不死になった」

「えええええええええええええええええええっッ！！！！」

変わりました（後書き）

とりあえず書きたい所までは書く事が出来たので、メインの活動に移ります。
また気が向いたらこちらは更新します。

※1紀元＝1億年程

閑話（前書き）

短い……。

閑話

「それでは柚木果狩(ゆずきかがり)家緊急会議を始めるとしましょう」

先代当主沙霧の発言により、その場に集合した一同に緊張が漂う。場所は本家の一室、四十畳ほどの和室だ。時刻は午後九時、集まったのは本家に連なる血筋の者達と、分家の代表格だ。

沙霧の隣にいるのは夫の栄蔵(えいぞう)、六十八歳ながらも未だ若々しい外見を誇る明朗快活な本家のご意見番である。作務衣姿で腕を組み、皆の緊張感を煽るようにニヤリと笑う。二人の前には四畳分の間を空けて長女で現当主の湖桃(こもも)。四十歳にもなると落ち着いた様子で静かに座している。その夫の和哉(かずや)は少々落ち着きなく、先代と目を合わせないように視線をあちこちに動かす。後ろには娘が二人、父親の奇行に溜め息をついていた。湖桃夫妻の隣には彼女の弟で長男の隆文(たかふみ)夫妻。その子供、男女二名未成年が背後に座っている。普段は本家より離れているので、隆文以外はガチガチに緊張しっぱなしだ。その列より更に後ろには分家の長達だ。残りは廊下側に面した障子を背に、本家内の使用人を束ねる壮年の男性と女性が控えている。現在集めるべき人員が揃っているのを確認した沙霧は頷いて会議、と言うよりは絶対の通達事項を話始める。

「知っている者もいるでしょうが、姉さんが目覚めました」

先代当主の姉と言う人物に対しては、この場の誰もがその存在を知っている。妙な過剰反応を見せたのは、今まさにその話を聞かされた柚木果狩家医療担当者、隆文だけだ。そんな馬鹿なと言った表情で母親に目を向ける。遥が病に倒れ、当時の当主は医療方面に手

を伸ばし始めた。それなりの成果を上げ、現在の医療関連に多大な貢献をしているが、それでも『遥の病に効く特効薬』の開発には至ってないと断言出来る。

「医療部門はそのままに。似たような症状は他にも確認されていますからね」

明らかにホッとした隆文の様子に苦笑する沙霧。

「……で、お前は遥ちゃんをどうするつもりなんだ？」

栄蔵が腕組みをして重々しい声を出す。長い付き合いの沙霧には夫が皆を緊張させて遊んでいると分かった。内心溜め息を吐きつつ、表情には出さないように話を続ける。

「不自由をさせてしまいますが、暫くは姉さんを保護の方向で。敷地内より外には出さずに、此処のみで過ごして頂こうと思っています」

眉をピクリとさせて渋い顔になる栄蔵。分家の長陣――子供の頃に彼女に世話になった事のある者達――から非難の視線が飛ぶ。保護と聞こえはいいが、この場合、沙霧が言っているのは、ていのいい軟禁である。皆の言いたい事が分かっている沙霧は、ざわつき始めた分家の者達を片手を上げて鎮める。

「現在姉さんを取り巻く情勢は非常に不安定です。つい最近現れたばかりの始族と終族との国交。実年齢に対してあの容姿を保ったままながら、滅びる事も出来なくなった事に本人がどこまで認識しているのやら。おまけに羽根の生えた赤ん坊が二人ですからね。外へ出すだけでどれだけの騒ぎになることか。誘拐や事故等になった場

合、彼等の報復がどれだけのモノか予測が尽きません」

一番問題なのは、遥が持っていて当人に一切自覚のない異能力だ。今となっては詳細を知り得るのが沙霧と栄蔵しかいないが、迂闊に特定の場所で使われては国だけのみならず世界にも大混乱が広がるのは想像するだけで恐ろしい。しかも本人は自分を極々普通の一般人だとしか認識してないのだ。まだ普通に過ごしていた当時、二人がどれだけ諭してもあの異能力のせいで自覚させるまでに至らなかった。

「遥様に会うぶんには問題ないと言う事でしょうか？」

鞍町（くらまち）家の長（幼少期に遥に良く懐いていた）が手を上げて質問し、会うくらいであれば問題ないので許可を出す。その際には余計な事を口走らないように注意はしておく。更に湖桃の背後へ目を向け、視線を合わせた事で硬直した彼女を呼んだ。

「静流」

「は、はいっ！　なんでしょう先代様？」

まさかこんな大仰な場で自分に声が掛かるとは思っていなかったらしく、飛び上がらんばかりに驚く湖桃の次女、静流（しずる）。年は十七、肩まで掛かるセミロングの黒髪を持ち、活発そうな印象を受ける。血の繋がりはあれど、柚木果狩家では世間一般の孫と祖母のような会話の場を持つことは難しい。

「貴女に姉さんの側仕えを命じます。貴女の時間全てを使って仕えよとは言いません。時折空いている時間に姉さんの話し相手をして下さい」

「はい、不肖柚木果狩静流、そのお役目承りました」

背をピンと伸ばしてその場で深々とお辞儀をする。にっこり笑って満足そうに頷いた沙霧は「通達は以上です。皆、今から宜しく頼みますよ」と話を終わらせる。廊下側に座っていた使用人たちはそれを合図として障子を開いた。丁度そのタイミングで、部屋から見える夜空を切り裂くように、直ぐ近くを起点として一条の光線が斜めに迸る。その場にいた者達がビックリして顎を落としたり、右往左往して騒ぐ中、未だに光が立ち昇る離れから、しんとした夜気によく通る悲鳴にも似た叱咤が聞こえてきた。

「ちょっとしーちゃん！？　ルシフェルさんの連絡先を聞いただけなのにいきなりレーザーをぶっ放さない！　しゅーちゃんも便乗しようとするんじゃありません！」

はっきりとこの場にいる皆に聞こえてきたのは、遥が赤ん坊を叱る声。相手が神にも等しい存在だと聞かされていても、遥の対応は極々一般的なものである。対する赤ん坊の所業には色々超越している所があるが。

ちなみに『しーちゃん』『しゅーちゃん』と言うのは赤ん坊二人の名前だ。犬や猫じゃないんだからと、非難が飛びそうだが、先方の意向もあってこうなった。なんでも「深い意味を持たせた名前だと、それに属性が引っ張られて変異するかもしれない」だそうなので。仕方なく会合の場で遥は、始族の赤ん坊を『しーちゃん』、終族の赤ん坊を『しゅーちゃん』と名付けた。始族代表のルシフェルは特に感慨も抱かなかったようだが、終族代表のサタンは爆笑していた。

遥には専属の使用人を二人付けてある。夕方前に聞いた報告によると、素っ裸ではみっともないから服を着せようと頑張っていたらしいが、二人とも嫌がって大変だったとか。結局、オムツだけを穿

かせるだけで遥は精も根も尽き果てたようだ。それでもあれだけの反応を見せられるくらいには回復したと言うのだろう。

「ははっ、変わらねぇなあ遥ちゃんは……」

昔を懐かしむような顔で夜空にのびる光条を眺め、笑いを漏らす栄蔵。またあの頃の楽しい日々に戻れるような気がした沙霧は夫と顔を見合わせて微笑んだ。

泣きました

はい、おはようございます。遥です。

会談から一夜明けました。沙霧、さーちゃんからは本家の端にある離れを今後あたしの部屋として使っていいそうです。うおー、マジか。ここ冷凍睡眠に入る前は御婆様の部屋だったんだよねー。超広いんだよここ、畳二十畳分もあるのよ。あたしとしーちゃんとしゅーちゃんと三人で使ってもまだまだ余白がいっぱいだ。

会談の終わる頃に名前を尋ねたら無いって言われたもんだから、「じゃあ、似合う名前をつけてもいいですか？」って聞いたんだ。でもそれはダメなんだって。

「ハルカ、それは出来れば遠慮して下さい」

「はあ、え？」

「坊ンたちはな、幼生の時は名前に影響を受けたりするんだよ」

「迂闊に何か深い意味を持つ名前をつけたりすると、根本的な性質から変異してしまい恐怖の大魔王になってしまう可能性があります。気軽な呼び名程度でしたら問題ありませんが……」

「……きょうふのだいまおうって……」

「過去に一度だけ二柱いっぺんに恐怖の大魔王になってしまった時があり、私達の世界は崩壊してしまいました。今のコチラ側の世界は何もかも一新しているのです。人の世まで同じにしたくは無いでしょう？」

ルシフェルさんのこの説明のときだけはサタンさんも真摯な瞳であたしを見ていた。それが紛れもない真実だと分かったので、適当につけようか。あだ名みたいなものでいいよね？

「じゃあ、始族の子が『しーちゃん』でー、終族の子が『しゅーちゃん』！」
「……まんまですね。まあ、妥当なところでしょう」
「『しゅーちゃん』！？　神にも等しいってのになんちゅー気さくな。ぶわはははははっ！　流石嬢ちゃん、一味違うなあ。うわはははははっ！」

キリッとした顔で淡々とした返事を返してくれるルシフェルさん。ここが学校であったら黄色い声が大音声であがり、卒倒者が何人も出そうなイケメンっぷりである。サタンさんは畳をバンバン叩いてまたもや大爆笑だ。……どこに笑う要素があったのかまったく持って不明です。まあ、名前？　あだ名？　に許可が出たのでよしとしよう。

「御二方とも色々人族とは違う面もありますので、後日補佐が出来る者を派遣致しましょう」
「ああ、そーだな。ウチからも滅多に居ないが嬢ちゃんの補佐になりそうな者を探して送るぜ」

それでその日の会談は終了したんだけど。探しておくって事は、終族ってみんなサタンさんみたいに大雑把な人しか居ないんでしょうか？

先ずはこの部屋に移る？　と言うか住む際に前のあたしの部屋（ずっと当時のまま残しておいてくれたそうで、感謝だよさーちゃん！）からタンスやら鏡台やらを移しました。でも洋服などは五十年の歳月に耐えられなかったので、後日色々揃えてくれるそうです。

後は生活用品が色々と。使用人さんも専属の人が二人付きました。柚木果狩の本家使用人は外部から雇うんではなくて、分家の末息子や末娘が起用されます。分家のほうは自分達で済ませたり外から信用できる者を雇ったりするらしいんですが。来たのはあたしより外見が年上の女性の人が二人。

片方は長い黒髪を肩の辺りでまとめて、物静かそうな美人の鞍町望さん。昔あたしがよく面倒を見ていた鞍町潤ちゃんのお孫さんらしい。もう一人が少し脱色した茶髪ぼさぼさショートカットで、元気有り余っていそうなカッコいい美人の薬師寺　渕華さん。この人も昔面倒を見たことのある薬師寺蓉子ちゃんのお孫さんだ。二人とも祖母から厳命されてあたしに付いてくれる様になったのだとか、あとで潤ちゃんと蓉子ちゃんにはお礼を言っておかないと。いや、もう実年齢は兎も角、外見的に目上だから「ちゃん」付けはマズいかな？

細かい部分はさておいて、問題なのは子供服なんですが……。翌朝、渕華さんがひと揃え二組分、持ってきてくれました。早っ！？

それでもってあたしの左側の布団に二人で寝ていた片方、しーちゃんに肌掛けをポンと着せてみたのです。あ、翼ですか？　この子たちの翼って色々と触れられたり触れられなかったりするようで、服の類はすり抜けます。

抱き上げたらふにゅふにゅ言っていたしーちゃんはと言うと。ぱっちり目を見開いた途端、ぎにゃ――――っ！！！！？！！　と、泣き出しました。

いや、どっちかと言うとあたしのほうが「ぎにゃあああああっ！？」って感じでした。だっていきなり泣き出したしーちゃんを中心として室内を大嵐が吹き荒れたんですよ。勿論あたしも吹っ飛ばされましたし、渕華さんも飛ばされました。離れの部屋を囲む障子

も飛ばされて、タンスも鏡台も宙を舞いました。パニックになったあたしは同じく爆風の中、目を回していた渕華さんをひっ掴み、丁度けらけら笑いながら大嵐の風の渦を楽しむしゅーちゃんを捕まえて、その子にお願いしました。「これなんとかしてええええっ！」って。お願いッつーか命令っつーか悲鳴？　それを言った瞬間、爆風が不意に止み、宙を木の葉のように舞っていたあたしたちは重力に従い床に落下しました。まあ、しゅーちゃんが広げてくれた黒い翼にふわりと受け止められて、かすり傷も無かったんですけどねー。

しーちゃんに着せた肌掛けは、見るも無残なボロボロの布切れとなれ果てて部屋に散っていました。唯一飛ばされていなかったこの子たちの布団の上で「ふぇ……」と、ぐずっていたしーちゃんを慌てて抱き上げてあやします。しゅーちゃんも覗き込むようにして、しーちゃんをなだめてくれます。

「ご、ごめんねー、しーちゃん。服、嫌いだったのー？」
「ぶー、あぶー」
「ぇぅうう」

相変わらずなんて話してるか分からないけど、慣れるしかないかー。一日二日じゃどうしようもないなー、意思疎通に関しては。その後服を見せるだけでそっぽを向くしーちゃんはダメだと思い知り、しゅーちゃんに拝み倒すようにしてなんとかオムツだけを穿かせる事に成功した。ここまでの所要時間五時間……。そしたら胸を張ってオムツを穿いた自分を見せびらかすような態度を取っていたしゅーちゃんに触発されたのか、しーちゃんもしぶしぶオムツを穿いてくれた。やったねあたし！　苦労が報われたよ！　そしてご協力ありがとう、渕華さん、望さん。

「は、はぁ……よ、かったぁ……」

「ど、どういたしましてぇ……」

その後専属の業者が呼ばれて、部屋が片付いたら夜になってました。

でも夕飯の時間になって、「赤ん坊のご飯はどうしますか？」と聞かれ、そう言えばその辺は聞かなかったなあと気が付いた。同時に疑問に思ったんだけど、あたしって目覚めてからろくに食事とってないよね？　夕飯の時間になるまで忘れてたよ。朝と昼の時間はそれどころじゃなかったし。

分からない時は専門家に聞いてみよう。サタンさんは適当な答えしか返ってきそうにないし、ルシフェルさんかな。でも連絡先を知らないや、しーちゃんはどうかな？

「しーちゃん、しーちゃん。ルシフェルさんに連絡って取れないかな？」

「あぶー」

「えうー」

二人で布団の上に座り、対面になって掌を合わせるだけという意味不明な遊びできゃっきゃっと笑っていたしーちゃんとしゅーちゃんが、あたしの方を不思議そうな顔で見上げて来る。

「ルシフェルさんに相談したい事があるんだけど、連絡の取り方って知らないかな？」

「ぶー！」

ビシッと右斜め上、たしか西の方。つまりはあちらの世界と空が割れて繋がっている方角、を指差したしーちゃんの指先がビカッと光った。そこからズバーっとペットボトル並みの太さの光線が離れの天井を突き破り、西の空へ伸びていく。突然の出来事にひっくり返って驚く渕華さんと望さん。おいおい、今度は天井に穴かぁ。さーちゃんに怒られそうですね……。

「ちょっとしーちゃん！？　ルシフェルさんの連絡先を聞いただけなのにいきなりレーザーをぶっ放さない！　しゅーちゃんも便乗しようとするんじゃありません！」

同じく指先を空に向けたしゅーちゃんを押し留め、しーちゃんの行為を止めさせました。

早く相談役が来ないかなあ……。

泣きました（後書き）

思っていたよりレギュラーが多い……。
携帯では文字ごと消えているというので、「のぞむ」の漢字を変更致しました。

初めまして？

翌日、テレビでは昨晩の夜空を横切ったっていう光に対して何も言ってませんでした。おそらく、取り上げることで国際問題？　異世界国交に何か支障が出ると思ったんでしょう。「ネットでは色々な噂が飛び交っていましたよ」と望（のぞむ）さんが教えてくれたんだけど。起点くらいは判明してるよね？　ソレすらも無いってことは柚（ウ）木果狩（チ）の権力恐るべし！

というか今日で目覚めて四日目なんだよね……。なんという濃い三日間だったことか……。

一日の始まりは渕華（えんか）さんが用意してくれた浴衣に着替えてから、しーちゃんとしゅーちゃんのオムツを変える。家の中では基本的に着物か浴衣です。特に絵柄も無い紺のグラデーションだけの浴衣。渕華さんたちは黒か紺一色の洋服、長袖スカート付き一体型。赤ん坊二人はオムツのみ……。うん、洋服を着せるのはまだ先なんだ。流石のしゅーちゃんもオムツは妥協してくれるんだけど、服までは嫌がるんだよね。もしこのまま外に出ても色々とオカシイよね……。

でも昼前に、さーちゃんと話す時間があったんだけど。柚木果狩家の敷地からは出られない、……らしいんだわこれが。基本は外部の悪質な考えを持つ人たちから赤ん坊二人を守るためと、世間知らずなあたしが外に出るのがまだ早いってことらしい。うん、まあ、五十年後の世界って良く分からないけどねー。初日に料亭まで行く道で見た外の風景は、冷凍睡眠に入る前とそんなに変わっていない印象だったけど。多分外に出るにはしーちゃんとしゅーちゃんもセ

ットになるから、二人に服を着せるという任務をクリアしないと出られないね。オムツだけの赤ん坊なんて人の目に晒せないし。

「いえ、姉さん。問題はそこではないんですが……」

「そうなの？　じゃあ誘拐とか身代金とかの問題？　むしろ誘拐とか実行に移す人が可哀想かも」

先日のレーザーとか室内で吹き荒れた大嵐を見るとねー。あれが対人に向けられるとか洒落じゃ済まないような気がするよ。あたしの膝枕でぷうぷう寝ている翼の生えた赤ん坊二人の頭を優しく撫でていると、さーちゃんは頭を抱えた。

「じゃ、もうそれでいいです……」

「さーちゃん大丈夫？　コメカミをほぐしたりしてるけど、この部屋で寝ていく？」

「いえ、まだ娘に伝えないといけないことが多いので。とても心惹かれるお誘いですが遠慮致します」

「そお？　じゃ、暇になったらいつでもおいで」

「その時はぜひ。では失礼します」

さーちゃんが一礼して出て行くと、部屋の端でカチコチになったまま並んで座っていた渕華さんと望さんが「ぶはー」と息を吐いて、肩を落とす。さーちゃんが来たとき慌てて部屋に駆け込んできたんだよね。「せせ、せ、先代様がいらっしゃいましたー」とかどもりながら。恐怖政治でも敷いていたのかな？

「こ、ここ、怖かった……ぁ……」

「先代様は礼儀作法に厳しい方ですから、前に出ると緊張しますね」

「そうかな？　さーちゃんは節度と礼儀を心得ていれば文句は言わないよ。まあ、昔からあたしには何にも言わなかったけど」

忠告みたいな事はよく言われたけどね。「姉さんは当主様とお戯れ過ぎです」とか「近すぎているのを不満に持つ者もいるんですよ」とか。真っ赤な顔して怒っていたけど、特に嫌がらせみたいなのは無かったかなあ。

「遥様、鬼ですか……」
「絶対、先代様好意持ってたよね、それ……」

「ん？　姉妹仲は良かったと自負している！」
「「先代様も大変だったんだね……」」

遠い目をしてるし、へんな事は言ってないよね？

今の季節は秋の終わり、冬の入り口ってところかな。なんとなく感覚が鈍ったみたいで、望さんに「風が冷たくなりましたね」とか言われても、特にそうとは思わない。これも不老不死になった影響なのかな？

日差しが暖かそうなので、縁側にタオルケットを敷いてしーちゃんたちと一緒に日向ぼっこ。本家南側の庭は、大きな池や見事な植木が多くて凄く壮観な光景が広がっている。昔ちょっと庭師さんにツツジの刈り込みとかをやらせてもらったことがあったんだけど、全部同じ形になって庭師さんと御婆様が困惑してたなあ。

しゅーちゃんは黒い翼を広げてタオルケットの上に腹這いになって「くぅくぅ」と寝ている。寝顔は天使のようだ。いや、色は黒いけど。可愛いし、美人さんだし、保護欲がかきたてられるなあ。しーちゃんは縁側に座るあたしに寄り掛かってお昼寝中。こっちもブロンドがお日様にキラキラ輝いて超美人！　白い翼は小さくなっていて、あたしの左右に突き出し、風になびいている。うーん、こっちも可愛い。自然と頬が緩むなあ。ニマニマよ、ニマニマ。

柚木果狩家の敷地から出るのを禁止されたけど、元々あたしの行動半径は狭いから特に不自由はしていない。この本家は小高い丘の頂上に建っていて、そこから麓まで参道状に階段が繋がっている。参道の左右にはそれぞれの分家が建っていて、下から上がってくる者は三箇所の分家がそれぞれ管理する大門を潜らなければ本家まで辿り着けないようになっているんだよねー。あたしは顔パスで通れるけど、麓で薬師寺家の管理する壱の門は通れないという事だね。弐の門は鞍町家、参の門は献笙家が管理をしている……ハズ。階段の途中には一族の者限定で売ってくれる和菓子屋さんとか、着物屋さんとかあるしね。丘の裏手は散策道が広がっている。赤ん坊の世話に専念してると、ロクに出かけられるコトが出来るのか疑問だし。

空を見上げて雲を眺めながらゆっくりと過ぎる時間を楽しんでいると、望さんがやってきた。お茶と最中が載ったお皿を、あたしの邪魔にならない所に置いてくれる。

「ありがとうございます」
「どう致しまして。それとお目通りになりたいという方が見えられていますが、如何なさいますか？」
「ん？　蓉子ちゃんや、潤ちゃんですか？」
「いえ、祖母ではなく、本家の方です」
「んん？　さーちゃん以外だと栄蔵兄さんくらいしか知らないんで

すが、会いましょう」
「分かりました。しばし、お待ち下さい」
足音も立てずに静かにこの場を去る望さんを見送ってしばらくすると、本屋敷からの渡り廊下を通って見た目同じ位の年の女の子がやって来た。薄い青地に黄色いアクセントを加えたブレザーの制服を着ている。髪はセミロングで、快活そうな表情と強い意志の瞳を持っていた。あたしより五メートルほど離れた床に、静かに座り、その場で手をついて深々とお辞儀をする。
「初めまして、先代様の姉上殿。私は先代様の娘、湖桃（こもも）が次女、柚木果狩静流（しずる）と申します。先代様に貴女様の側で仕えよと、命じられました。なにとぞ宜しくお願い致します」
えーとその”先代様の姉上”って呼称はややこしいな。姉妹の孫だから……又姪？　つーか、本家の次女をあたしの側仕えにしていいのか？　ここまで腰が低いとなんて声を掛けたらいいのか分からないなあ。
……どうしよ？

初めまして？（後書き）

決めたノルマまで連投予定です。
丁寧語は結構適当、雰囲気だけ感じてもらえれば、です。

困らせよう

いくら『先代の姉』だからといってそこまでかしこまる必要はないと思うんだ。そもそも、あたしは人生経験少ない小娘だし。見た目同い年くらいの人に敬語使われてるって背中が痒くなるわ。なので、頭を上げて貰い、「普通に気さくな感じで良いよ」って言いました。まあ、「そんなとんでもないです」と両手を振って断られましたけど……。

「同じ本家者なんだし、差し引きゼロでいこう」
「恐れ多いです。先代様の姉上殿に対して」
「そんな仰々しい呼び方じゃなくて、名前で良いよ？　遥って」
「目上の方にそのようなこと言えません」

おおう、結構強情？　「いや、当たり前じゃないかなー」みたいな苦笑顔で側に控えている渕華さん。実年齢だけの目上なのに敬意を払われても困るよ～。こうなりゃトップと直談判だ。

「望さーん、内線ってありますー？」
「あ、はい。これですね。どうぞ」

両手で恭しく差し出された板っきれみたいなのを見たあたしの目は点になった。

「なにこれ？」
「内線電話です」

形は長さ半分になった割り箸程度の大きさ。上下の端に点々と小さな穴が付いているだけの代物でした。「どなたにお掛けですか？」

と聞かれたんで、「さーちゃんに」と返す。

「それでしたら使い方をお教え致しましょう。まず側面の小さい出っ張りを押しましてですね」

「あ、なんか表面に縦並びで、青い光の数字が浮かんできた」

「ここに番号を打ち込みます。先代様の仕事部屋でしたら『１００１』ですね。どちらかが無言五秒でいれば勝手に切れますので。はい、どうぞ」

うわぁい、電話の小型化が進んでるなぁ。こんな薄っぺらくなってるとは思わなかったよ。あたしのお腹に寄りかかるしーちゃんを左手だけで支え、小さな内線の受話器を右手に持つ。やや、ざわついていたからか、しゅーちゃんの黒翼がバサリと動き、そのそよ風を受けたしーちゃんが身動きをし始めた。

「あちゃー、起きちゃった……」

『……姉さん？』

受話器の向こう側から訝しげなさーちゃんの声が聞こえてきた。まあ、手っ取り早く済ませよう。

「さーちゃんのお孫さんが挨拶に来たんだけどー」

『静流が何か粗相でも？』

うわぁー、声が怖い怖い。

「いやいやいや、礼儀正しいよ。良い子だよ。でも見た目同い年くらいなんだから、名前で呼んで貰いたいんだよねー」

『姉さん。目上の者に礼儀を弁(わきま)えている、当たり前ではありませんか。貴女も本家の者なのですから、家のしきたりには慣れて頂きま

すよ。昔も何度か言いましたが』

おぅふ、さーちゃんの方が何倍も頑なだったかも。うーん、じゃあ仕方がないから最後の手段。

「分かりました」

『おや、姉さんにしては物分かりがいいですね？』

「申し訳ありませんでした」

『……はい？』

「先代様の貴重なお時間を、私（わたくし）の些末な悩み事をお聞かせすることにあててしまい、自分の行動を恥じるばかりです」

『い、いえ、姉さんが畏まる必要はないんですよ？』

「いえ、今からでもキチンと線引きをして、先代様にも敬意を払うべきですよね。では時間を無駄にしてしまうので、失礼致します」

『姉さんっ！？』

話す側の穴を押さえて受話器を遠くに離す。さーちゃんが弁明している声が聞こえてきたけど、すぐ静かになった。うん、切れた切れた。便利な世の中になったねえ。さーちゃんの声が聞こえていたらしい、引きつった顔の望さんに受話器を返して、静琉ちゃんを部屋の中へ招待する。あたしが立ち上がるより早く、翼をはためかせたしゅーちゃんが縁側の屋根下付近まで飛び上がった。あ、ほっぺにタオルケットのシワ痕が付いてるわ。しーちゃんはあたしの腕の中でまだこっくりこっくりと舟を漕いでいた。床のタオルケットを拾ったあたしの頭上に、しゅーちゃんは乗る。ううむ、怒るべきか叱るべきか、悩むなあ。胸にしーちゃん、頭にしゅーちゃんでトーテームポールの支柱か、あたしゃあ……。

「座布団座布団」と呟くあたしに渕華さんが座布団を三つ渡してくれる。上座にひとつ置いて、静流ちゃんにひとつ勧めて、あたし

はその対面に。胸に抱くしーちゃんの白い翼があたしの左右に広げられ、頭に乗るしゅーちゃんの黒い翼が肩口に垂れ下がっているけれど。なんか新種のモンスターになった気分です。怯えた顔で私の前に座る静流ちゃん、怒られるんじゃないかと思っているみたいだね。

遠くからトタトタターっと小走りっぽい足音が聞こえてきて、障子がスパアアァン！　と開けられた。必死の形相で障子を開け放ったさーちゃんを見た渕華さん、望さん、静流ちゃんがびびりまくって硬直する。コレだけ騒がしい状況にしゅーちゃんは再び寝入ってしまった。……あたしの頭の上で。逆にしーちゃんがぱっちり目を覚まして、「あぷぅ」と大あくびをする。それでも私の膝の上から動こうとせずに、初めて見る人（静流ちゃんのことね）をまじまじと見上げていた。

「ね、姉さん！　なんですかさっきの態度は！？」
「まあ、先代様。落ち着いて下さいまし。さあ、上座にでも座って。皆の前なのですから」

あたしがきっちりとした姿勢で上座に置いた座布団を勧めると、立ちくらみでも起こしたようにふらふらと廊下に座り込んじゃった。
「先代様！？」と血相を変えた渕華さんたちが慌てて肩を支える。静流ちゃんは突然起きた不測の事態に対応できないまま、「あわわわわ」とかうろたえていた。

「お疲れなのでしょう。望さん、お布団を敷いて下さい。先代様には休息が必要のようですよ」
「い、いいえ、姉さん。……わ、私にまでそんな他人行儀止めてください！」
「大丈夫ですよ、今後は礼儀を弁えて、キッチリと線引きを致しま

す。先代様にも無礼の無いように……」
「ね、ねえさあああん……」

ポロッと涙を零したさーちゃんにその場に居た一同がギョッとなる。いかん、ちょっとふざけすぎたか？　あたしの懐から飛び立ったしーちゃんの代わりに、さーちゃんを抱きしめて頭を撫でてあげる。ううん、白髪が増えてきたねー。ウチ一割くらいは確実にあたしのせいだよね。

「うう、酷いですー」
「あああ、ごめんねごめんね」

ほんわか状態のあたしたちとは別に、三人が石化しているんだけど。ま、いっか。なんとかなだめて落ち着かせて、威厳のある先代様に戻らせて。静流ちゃんが気さくな態度を取ってくれないんだよ～。って説明をしたら、咳払いをしたさーちゃんは「いいでしょう」と許可を出した。

「ゑ？」
「静流、貴女には姉さんの名前を呼ぶことを許します。本人も望んでいることですし、またこのようなことがあると、私も精神的に痛手を負いますので」
「よしオッケー！　じゃあ静流ちゃん、今度からはあたしのこと遥って呼んでねー」
「えええええええっ！？」

「それと姉さん」
「ん？」
「赤ん坊にアレはまずいのでは？」
「は？」

さーちゃんの促した方を見ると、いつの間にか起きていたしゅーちゃん（どうりで頭が軽いと思った）が、しーちゃんとモナカの乗った皿を挟んで座り、「食ってみる？」「いいね、食おうか」みたいな雰囲気をかもし出している光景でした。

「ってこらあああっ、二人ともーっ！　モナカなんか食べたらダメエエエエェェッ！」

慌てて皿をかっさらったのは言うまでもありません。

困らせよう（後書き）

毎日連載って難しいです。
ちょっとギブアップ。

二重奏

さーちゃんを困らせてから更に数日が経ちました。相変わらず赤ん坊たちは服を嫌がって着てくれません。これはやはり長い目で見るしかなさそうです。

あたしの部屋となっている離れには、使用人が寝泊まりする部屋と炊事場、浴場にトイレなどもセットで建てられています。渕華さんと望さんは、交互に数日おいて泊まり込んでいる、とのこと。直ぐ下に実家あるのにご苦労様です。

なんとか赤ん坊二人の世話も慣れてきました。しーちゃんはちょっとツンデレ？　負けず嫌いと言うべきか。しゅーちゃんはマイペースかな？　勧めて断られそうな案件は先ずしゅーちゃんに受け入れてもらい、しゅーちゃんが見せびらかす事によって、対抗意識を燃やしたしーちゃんが真似をする。と、いう図式が出来上がっています。

とは言えあれから何かやってもらう事が増えた訳でもなく。ちょっとお願いして、部屋の中では飛ばないようにしてもらったくらいかな。やっぱり赤ん坊と言えばハイハイだよね！　人間の赤ん坊であれば、首が据わるようになってからなんだけど。生まれて数週間しか経ってないように見えても、足腰しっかりしてるし、問題なし。

やり始めたのはやっぱりしゅーちゃんが先で、こうやるんだよーってあたしが実演。翼をちょっと小さめにしてからあたしの後を追うようにちててててーーって、早っ！？　でも笑顔だしコミカルだし、かぁわぁいーいー！！　あたしの膝上まで上がってきたのを抱きしめて、頬をすりすりしながら「可愛いー！」を連呼してると、

「チッ、しょーがねぇなー」みたいな感じでしーちゃんもトテトテと。

「うーん、しーちゃんもしゅーちゃんも可愛いぃ！　最高！　ステキ！」

「遥様……」

「壊れてる壊れてる」

望さんと渕華さんが呆れたように笑っていたけど、二人共しーちゃんとしゅーちゃんを猫可愛いがりしてるじゃないか。あんまり触れられないみたいだけど。この辺は前にルシフェルさんが言っていた「普通の人族が～云々」に該当するんだろう。少しの時間でも密着していると、渕華さんや望さんでもだんだん気持ち悪くなってくるらしい。

あと、ご飯に関してはよく判らないので、朝昼夜に卵だけで味付けしたお粥だの、すりリンゴだの用意してもらって、手ずから食べさせてます。

「はい、あーん」

「あーぶ」

「むー」

食が細いのか、二人で小さなお椀ひとつ分食べるのがやっとみたいだけど。

そんなある日のこと。

あたしがトイレから戻ると、二人で座布団を積み重ねて遊んでいた場所に、しゅーちゃんだけがぽつーんと残っていた。

「あ、あれ？　しーちゃんは？」

「あぷ～」

しゅーちゃんが黒い翼で庭の方を指し示したんでそっちを見ると、庭木の向こう側に白い翼が見え隠れしていた。

「しーちゃん！　どうしたの？」

縁側まで行って呼び掛けると、びっくりしたのか飛び上がってこっちを見る。おいでおいでーと手を振ったら、ばっさばっさと翼を動かしてあたしの胸に飛び込んで来た。右手に青い何かをぶら下げて。

「ちょっとしーちゃん、何を捕まえて来……」

「ちょっ、離してぇ、離してぇな坊ン様っっ！？」

「ぷー！　ぷ」

「……は？」

しーちゃんが尻尾を掴んでぶら下げている、鼻の頭だけ白い真っ青な子猫がもがきながら悲鳴をあげた。よく見ると、肩口のあたりにちんまりとした白い翼と黒い翼が一枚ずつ生えている。……始族？　終族？　どっち？

「めっ！　だよ、しーちゃん。離しなさい」
「むーぷー」

パッと尻尾から手を離された青猫さんは畳にボテと落下した、顔面から。……うわ痛そう。そこへハイハイでしゅーちゃんが近寄って行く。慌てて起き上がった青猫さんは、お座りをして頭を下げた。

「これは終族の坊ン様、ご機嫌うるわひにゅう……」
「こ、こら！　しゅーちゃん！？」

挨拶を言い終わらないうちにしゅーちゃんがヒゲとあごを引っ張り、青猫さんは「ひぎにゃー！」と悲鳴をあげた。あたしが軽くポンとしゅーちゃんの頭を叩くと手を離し、その表情が歪んでポロポロ涙を流し始める。

「ひゅぐっ」
「しゅーちゃん。人（？）の嫌がることをしたらダメでしょ！　しゅーちゃんが同じ事されたら痛いでしょーに」

言い聞かせてみたんだけど、しゅーちゃんはそのまま本泣き。途端にしーちゃんまでつられたのか「びえええええぇぇ―」と泣き出しちゃう始末。

「あわわっ、ちょっ、しーちゃんを怒ったんじゃないでしょー。ああもぉ、しゅーちゃんも！」

「おぉお、坊ン様たちに手をあげるとは、怖いもの知らずな姐さんやわぁ……」

ごめんなさい猫さん、話は後にして。

二重奏（後書き）

息抜きなのに日間ランキングで１００位以内に入ってました。
読んで頂いた方々、ありがとうございます。
猫の言葉使いは適当、書き分けを放棄し（ｒｙ

誕生秘話？

二人をなだめるのは大変でした。しゅーちゃんを泣き止ませればしーちゃんが泣いたまま、しーちゃんを泣き止ませればしゅーちゃんが再び泣き出すし。延々とそんなのを繰り返していたら、渕華さんの「遥様、ご飯食べられます～？」と言う一言でピタリと終了しました。

……ふ、二人共、そんなにすりリンゴが気に入ったんだね……。つ、疲れた。苦労とはなんだったのか……。次からは物で釣ろう。

……で。

「お初に、始族から派遣されて参りました。スフインクスと申しますわ。どうぞよろしゅうに」

あむあむと食事中に、姿勢を正した青い子猫さんがぺこりと頭を下げた。青くて喋る子猫を前に、渕華さんと望さんがポカーンと口を開けている。普通に受け入れるあたしがオカシイのかな？

しゅーちゃんとしーちゃんは仲良く並んで鳥の雛みたいに口をあーんして待っている。そこに小さいレンゲですりリンゴを入れてあげると、むにゅむにゅと口を動かしてよ～く味わってからしばらくして、こくんと飲み込む。その間にあたしは自分の御膳から食べられる暇が出来るんだけどね。しかし、そうか、始族の人だったんだ。

でもなんで白と黒？

疑問点を聞いてみると、

「ああ、この翼でっか？　実はわち、生み出したんは始族だったんやけど、育ててくれたんは終族なんやよ」

首を傾げたあたしたちに、スフインクスと名乗った青猫さんは衝撃の事実を語ってくれた。なんでも始族と終族は死期を悟ると自分の後継者を造り出すのだそうだ。始族なら丸い光の珠、終族なら闇の珠を作ってそこに残った力を注ぎ込んで、最終的には自分のコピーが生まれるらしい。でも経験は真っ白なので、人生やり直しなんだって。スフインクスちゃんの場合、途中で作成者がお亡くなりになり、酔狂な終族が後を継いだので今の生があるという。普通ならそのまま放置され、自然消滅するのがオチだとか。

「まァ、わちみたいな半端モンはそれなりに数がおるに。姐さんが気ニィせんでもよかよ」

なんか可哀想だなあと、思ってたら気を使われてしまった……。しかし、妙な言葉使いだね。突っ込んだら負けなのかな。

「坊（ボ）ンって呼ぶのはサタンさんだけかと思った」

「その酔狂な終族がサタンの旦那の事ですわ」

なんと、ぶっきらぼうかと思ったら、意外と面倒見がいいのか、あの人。

「暇つぶしィ言うとりましたンですがーね。」

そうケラケラ笑うスフインクスちゃん。あ、ただの買いかぶりだったわ。

「姐さん凄いおすなぁ、坊ン様たちに手をあげるわ、命令するわ。ウチのモンらが知ったら仰天するえ」
「どんだけ甘い育て方なのよ、それ。あと、命令じゃなくて躾だから」
「あむー」
「むにゅ」

子供用のお椀に半分ほど入ってたすりリンゴがなくなると、しーちゃんは満足したように座布団へコテンと転がった。望さんがタオルで口元を拭いてあげると、直ぐに「くぅくぅ」と寝息を立て始める。しゅーちゃんの口元をあたしが拭い、自分のお昼をゆっくり食べようとしたら。しててー、と素早いハイハイでしゅーちゃんがスフインクスちゃんを捕獲する。この高速移動はもうハイハイじゃないよ。

スフインクスちゃんもさっきみたいに顔面引っ張られるんじゃないかと、ビビって硬直している。その緊張は杞憂だったようで、しゅーちゃんはスフインクスちゃんを抱きしめたまま、寄りかかるように寝入ってしまった。寄りかかるちゅーか、押し潰す？

「……くぅ」
「ちょっとちょっと姐さん。わち、どうしたらいいんじゃろ？」

「んー。頑張れ」
「そないな殺生過ぎや！」
「騒いだら起きちゃうよ」
「あわわわわ」

「これは何かぬいぐるみとか必要かな？　猫はあんまりだから、犬かクマで。渕華さん、手配お願いしていい？」
「はい、何か適当に見繕ってくればいいよね？」
「チョイスはお任せします」
「りょーかい」

びし、と笑いつつ敬礼した渕華さんを望さんが「失礼だよ」と突つく。渕華さんフランクだけど、望さんは真面目だよね。

誕生秘話？（後書き）

とりあえず今回の更新はここまで。また話を思いついたら続きを書きます。

レギュラー陣は多分これくらいかな？

猫ふえる

さて、スフインクスちゃん、「呼びにくいようでしたら略されてもよろしゅうっすよ」とか言われたので、略してスフちゃん。彼女？　に色々、始族や終族の神子に共通する生態について簡単に教えて貰いました。スフちゃんの前身は前の始族の神子を面倒見ていた乳母だったそうです。

まず、本来であれば食事は必要としない。これは神の種酒（ソーマ）を飲んで不老不死となったあたしにも共通するらしいのですが。じゃあなんで生きてるんだ、と問われると『エーテル』とか言う世界を誕生させ、構成している謎物質を体が適当に摂取しているらしい。但し、地球側はあちら側の世界に比べると謎物質の存在密度が低い為、食事をも必要としているのではないか？　と言う見解だそうな。しかもこの場合、食事自体が嗜好品のような物で、食べなくても別に影響はないらしい。

「ええとつまり、地球側は薄いけどエーテルはあるから、何も食べなくても餓死する心配はない？」
「ええまあ、そないな感じで」
「あーぷー！」
「あーむー！」

しゅーちゃんとしーちゃんはあたしの前、スフちゃんに抗議するみたいに座って、二人で自分たちのお椀を持ち上げている。食事制限反対！　って言いたいんでしょうねー、多分。なんと微笑ましい。つか、そのお椀どうやって持って来た？　あたし、目ぇ離してないよね？　二人ともこの部屋でさっきまで寝てたよね？

「まァ、姐さんも坊ン様方も餓〝死〟するなんてぇ夢のまた夢でしょうね」
「あー、不老不死だっけ……」

この意味は分かるけど、実感は湧かない。多分、分かるのは少し年月が経って、他の人との差が明確に現れてからだと思うな。ただでさえ、さーちゃんたちと五十年の隔たりがあるからねー。一応、この会話は渕華さんや望さんにも聞いてもらっている。二人もさーちゃんに報告の義務があるだろうしね。

「あと、姐さんの立場ですが、坊ン様方と同等のような感じで両族に認められましたーに。覚悟しとぅてください」
「……は？」

なんだそれ？　と首を傾げるあたしにスフちゃんがしてくれた説明によると、とてつもない例外ではあるが、公式的にも神子扱いだそうな。それは何か、あたしもこの子たちみたいに蝶よ花よと育てられなきゃなんないのか？　何年か経ったら生まれ変わってこの子たちみたいな赤ん坊になるんだろうか？
よく判らない。先の事はさておくとして、神子並みであればそれなりに強い力を秘めているらしいが、おそらくそれは使えないのだそうな。

「わちらの力の放出器官がこの翼なんですのや。姐さんには翼が無いから、使う事が出来ないと思いますねん」
「ええとつまり、文字は知っていても筆記用具がないから字は書けない、とかの認識でいいのかな？」
「ええ、その場合には姐さんは先ず文字の勉強をせにゃならんでしょうねぇ」

だからって力なんか持ってたって使い道なんかなさそうだしなぁ。手足があって科学の産物があって、これ以上望んだって扱いきれんわ。

「あーあぷー」
「むーあー！」
「はいはい、ご飯はなくなったりしないから。あとお椀は返そうね」

あたしの浴衣を掴んでくいくいと引っ張るしーちゃんを撫でて落ち着かせ、お椀を振り回すしゅーちゃんを抱き寄せる。ついでにお椀を渡して貰い、望さんへ返す。望さんも「いつの間にここに？」と首を捻っていた。

「じゃあ、スフちゃんはここに住むってことでいいのね？」
「は、はぁ。ルシフェルのアンさんとサタンの旦那との繋ぎも必要でっしゃろ？」

スフちゃんの答えを聞いた望さんが一礼して「では、部屋を用意させますね」と言ったら、慌てて首をぷるぷる振った。

「いや！　そんな客人扱いせんでえぇから！」
「でも、始族様からのお客様ですから、蔑ろにしてしまうと私たちが怒られてしまいます」

どうしましょう？　と困り顔をする望さんの目は楽しそうだ。計ってますね……。

「だったら、この部屋で一緒に住めばいいんじゃない？」
「ひぇっ！？　坊ン様方と一緒だなんて恐れ多い」
「あとはお客様扱いで広い部屋にポツンとひとりだけ、とかの選択肢しかなくなっちゃうけど、どっちがいい？」

あたしと望さんと顔がもうニヤニヤ状態の渕華さんと、しーちゃんとしゅーちゃんの視線を受け、汗だらだらのスフちゃんが最終的にだした答えは……。

「……一緒の部屋でいいどす……」

やったね、あたし、同居人が増えるよ。

猫ふえる（後書き）

メインがぜんぜん進まないのでコッチを更新しました。
書いてはいるんですけど進まない。……何故だ？

ぬいぐるみ、飛ぶ

さて、新しい同居人を迎えても、畳二十畳の部屋はまだまだ広々しています。スフちゃんですが、あたしたちが主に部屋の南側を使っているのに対し、猫用の丸籠型小屋を住処として部屋の北側隅に陣取っています。あっちって鬼門じゃなかった？

それはもう本人の意志なのでとやかく言いませんが、時々しゅーちゃんたちに捕まって寝床に引っ張り込まれてるからねー、いい加減腹を括った方がいーんじゃないかな？

「あーぶーあー」
「ぷー！　むーむー」
「でか過ぎ……」
「そうですか？」

ある日、母屋の使用人さん何人かが抱えて持ち込んできたのが、先日渕華さんに頼んだぬいぐるみでした。超でかっ！　１／１スケールライオンぬいぐるみリアル嗜好とか、どう見ても特注でしょうこれ！

部屋の中央に置かれた腹這い座り状態のライオンぬいぐるみに早速よじ登ろうとするしゅーちゃん。半開きになった口の中をのぞき込み、タテガミを引っ張るしーちゃん。

「抜ける抜ける、毛が抜けるから。止めなさい、しーちゃん」
「あーうー」

背中に登るまでは良かったけど、そのまま反対側へコロリンと転がるしゅーちゃん。ああもう、危ないからちょっと待ちなさいってば。

あたしにたしなめられても「きゃっきゃっ」と喜ぶ二人。気に入ったんですね、そりゃ良かった。あたし的には夜に見ると怖そうだわこれ。今のウチによく見ておいて、夜に悲鳴を上げないようにしよう。

「は！？　クマは？　クマももしかして実物大とか？」
「流石にクマは大きすぎるので普通サイズですが」
「ライオンも充分大きいと思うんだ……」

渕華さんが抱えてきたのは、世界的に有名なクマぬいぐるみのブランド品。その辺の椅子に座らせて人と並べても遜色ない少年サイズと言うべきか、充分デカいわそれ。つか、幾らするのよ、赤ん坊のおもちゃにしてはかなり高額でしょう。

「あーうー！」

ハイハイ突進して来たしーちゃんが一体に飛び付き、一緒になって転がって行った。ちなみにクマは二体。黒っぽいのと茶色っぽいの、両方とも綺麗なレースのリボンが首に結んである。転がっていった先にあるのはスフちゃんの籠部屋である。ボーリングのピンよろしく、どーんと吹っ飛ばされた。「ナニゴトォー！？」とか悲鳴が聞こえたけど、中に居たんだ……。

「こら、しーちゃん。あぶないでしょう、飛びついたらダメ」
「あーうー」
「ちゃんと二つあるんだから、しゅーちゃんと仲良く分けなさい」

ハイハイしてやってきたしゅーちゃんと、二体のクマぬいぐるみを前にして「あー」「むーうー」「ぷーむー」「あーぷー」と協議するみたいに会話（？）を始める。

「ああしてると可愛いんだけどねー」
「そうですね。可愛らしいですよねー」

ホッとした感じで肩の力を抜いて渕華さんと話す。望さんと渕華さんも時々抱きしめていたいらしいんだけど、長く触れられないのがネックなんだよね。赤ん坊らしくぽやぽやしている所を眺めるのが二人の楽しみみたい。

「あうー」
「むー！　ぷー」

そのうちになんか結論が出たのかしーちゃんが茶色っぽいクマを、しゅーちゃんが黒っぽいクマをビシッと指差した。って二つとも宙に浮いたんだけど、黒っぽいのだけが逆さま……。サタンさんにやられた腹いせかな、しゅーちゃんってば。

「ぷー！」
「むー！」

二人の掛け声と共に天井すれすれに浮いていたクマぬいぐるみ二体が勢いよく飛び、部屋の中央でばちこーん！　と激突した。そのまま離れてぶつかり、離れてぶつかりを繰り返す。

「……」
「……な、なにがしたい」
あたしと渕華さんはあまりの脱力光景に畳に突っ伏した。
赤ん坊のやることはよう分からん。

結局、延々と続いたのであたしの雷が落ちました。

ぬいぐるみ、飛ぶ（後書き）

「むー」系がしーちゃんで
「ぷー」系がしゅーちゃんです。

酔っ払い、飛ぶ

もう存在ごと忘れてたんだけど、なんとこの部屋テレビがありました。今まで殺風景な部屋だな～、って思ってたんだけどハイテクの固まりだったわ。お布団は押し入れから出して敷きますが、望さんたちが人力で。

多目的リモコンのスイッチひとつで半畳が床からせり上がり、テレビが出現します。気にもしなかったんだけど、部屋の照明も天井全体がぽわぽわと光ります。一応、暖房もついているらしいのですが、寒暖をあまり感じなくなった身としてはよく分かりません。外へ出て吐く息が白ければ寒い、としか判断するところがないし。

「ぷーうー」
「あーむー！」

まあ、目的はしーちゃんたちにテレビの教育番組でも見せようかな～、と。でも、ちょうど夕方つけた時にやっていた相撲中継を見た二人は、なにが気に入ったのか、クマぬいぐるみを操って相撲をとらせています……。てけてんてん♪

ダンボールか何かで土俵を作ってあげようかな？

行司はライオンぬいぐるみらしい。威風堂々としたリアル嗜好百獣の王前で、本日何度目かの『はっけよーいのこったー』が始まる。

短い手足をバタつかせて塩を撒くマネをし、四股（しこ）を踏んだ（よう

に見える）クマぬいぐるみ二体は、礼をするように体を傾け向かい合う。

赤ん坊二人の「ぷー」とか「むー」の掛け声でポスンとぶつかり合い、手足をバタバタさせて戦う。……端で見ている分にはただの駄々っ子パンチ合戦にしか見えません。苦笑しか浮かびませんよ。

時々洗濯物を持ってきてくれる望さんとか、お茶菓子を持ってくる渕華さんが微笑ましい顔でその様子を眺めています。

あたしも見つつ、膝の上に寝そべっているスフちゃんを撫でながらブラシ掛けです。最初「恐れ多いれすっ」とか噛みながら恐縮してたんだけど、青猫の毛皮ってどうなってるか気になるじゃん。もう、強引に引っ張ってきました。ふわふわ～、もふもふ～、うーん、心地よい。

「遥様、よろしいでしょうか？」
「はい。何かありましたか？」

困惑した表情でやって来た望さんは「旦那様がいらっしゃいました」と、伝えてくる。この場合の『旦那様』と言うのはさーちゃんの旦那、栄蔵（えいぞう）兄さんの事だ。

栄蔵兄さんは当時、年が近いと言う理由で、あたしかさーちゃんの夫候補になる予定だった人だ。あたしがコールドスリープに入った後、当主になったさーちゃんと結婚したらしい。目覚めてから一度だけ会ったんだけど、なんか思ってたより老けてたね。さーちゃんより年食ってるように見える。あたしより二つ年上の六十九歳だ

から当然か。ああ見えてさーちゃんも結構辛辣だしねぇ。苦労したんだろうなあ。

「よーおぅ、はーるかぁ。げぇんきにぃ、こーそぉだてぇやってぇかぁ？」

「って、うわ、酒臭さ！？」

「ええ、ちょっとこんな状態でして……」

徳利をぶら下げて赤ら顔に千鳥足、真っ昼間から何で酔っ払ってんだ、この人は？　こんなのが訪問しに来ればそりゃ困惑するわ、先代の夫だから使用人じゃ追い払えないし。

なんかコールドスリープ前に抱いていた憧れとか頼もしさがこの一瞬で吹っ飛んだわ。

「ぷー！」

「むー！　うー！」

匂いを嫌がったしゅーちゃんとしーちゃんが大慌てであたしの所へ逃げ込んでくる。二人とも〝飛んで〟だ。そういえば、サタンさんが料亭で飲んでた時はまったく酒臭くなかったなぁ。エチケットは完璧だったんだねー、あの人。

「ちょっと兄さん、赤ん坊がいる所で酒の臭いを振りまかないで下さい」

「おぉう青ーいねこじゃねぇか、珍しいなァ。二匹目だァ」

そんなのが何匹も人間界におるかい。呆れていたあたしから、ソロソロと逃げ出そうとしていたスフちゃんをがっしっと掴む兄さん。

駄目だ話聞いてねー。でも妹の旦那だから本当は義弟？　ややこしいなあ。スフちゃんも嫌なら嫌って言わないと、毛を逆立てて我慢してる場合じゃないよ。

徳利からじかにごっごっと酒を飲んで「ぷっはー」とスフちゃんに吐きかける兄さん。さすがのあたしもスフちゃんにその扱いはどうかと思う。口を開こうとしたあたしの左右で、何かがドカンッと存在感を増した。

「「あーうー！　ぷー！！」」

「うおぉぉぉぉぉぉっ！？」

二人が揃って怒ったような声を上げた瞬間、その場からキリモミ回転してあたしの頭上を飛び越えた兄さんは、障子をぶち破って飛んでいった。スフちゃんはあたしの手の中にぽふんと落ちてくる。遠くで響く落水音。あー、母屋の前の池に落ちたなコレは……。

しかし、また障子壊しちゃったよ、さーちゃん怒らないかな？

「ふー、やれやれー」とかいうように肩を落としたしゅーちゃんとしーちゃんは、タオルケットを自分たちの昼寝用の布団から持ってくると、スフちゃんに掛けてごしごしと拭きはじめた。

「あのぅ、ちょっと？　坊ン様方ぁ？」

「お酒のにおいがイヤだったんだねー。スフちゃんは大丈夫？」

「ええ、まぁ。サタンの旦那に時折晩酌、つき合わされますよってに。さっきの人は大丈夫でっしゃろうか？」

「まー、自業自得なんじゃない？」

母屋の方で、使用人さんたちの悲鳴が聞こえてくるから、さーちゃんの耳に入るのも早いだろう。

酔っ払い、飛ぶ（後書き）

もうちょっとのほほんとした話が作れないものかな、私は……。

女女女しい

「この度は不快な思いをさせてしまい大変申し訳無く……」

「わちは気にしてませんよってに」

「ぶーむー」

ちょっとした騒ぎのあと、当主と先代がスフちゃんとしーちゃんに頭を下げる、とかいう事態になりました。まだ国交が結ばれたばかりな時期だから、一族の馬鹿爺の行動で戦争に発展した。なんて結果になったら国に対しても顔向け出来ないんだそうな。

オムツだけの赤ん坊と子猫に土下座する女性二人の図。……なにかちがう。

「ぶーぷー」

「むぷー」

横から口をだしたしゅーちゃんに握り拳を振って力説するしーちゃん。あたしには何が言いたいのかまだ分からない。スフちゃんだけがコクコクと頷いている。しかし、兄さんは初冬に池へ落ちたっていうのに風邪もひいてないらしい。なんちゅー頑丈な老人か。

「始族の神子様は遥様に酔っ払いが近付くのが我慢ならないそうですじゃ」

「あたしぃ！？」

いきなり対象があたしに向いたので素っ頓狂な声を上げてしまった。ちょっとさーちゃんが眉をひそめたけど、この場ではどうこう

言えないから沈黙を保つ。

「ぷーぷー」
「むーうー」

あたしの腕を左右からそれぞれ掴み、一緒になってぷらぷらさせるしゅーちゃんとしーちゃん。所有権を主張しているような、違うような？

あたしが首を傾げて苦笑すると、膝の上へ腹這いになるしーちゃん。頭を撫でていると、こっくりこっくり舟を漕ぎ始める。しゅーちゃんは黒っぽいクマぬいぐるみをずりずり持ってきてあたしの横に置き、覆い被さるように乗っかる。洗濯物を持ってきてくれた望さんから新しいタオルケットを受け取り、掛けてあげる頃には二人とも寝入ってしまった。

「ええっと……」
「叔母上様、私共は許していただけたのでしょうか？」

話を途中で切られた形になり、さーちゃんと湖桃ちゃんが困惑してる。スフちゃんに目を向けるとコクコクと頷いてくれたので、話はこれで終わりだと判断していいみたいだね。

「大丈夫みたいだよ」
「……ほぅ」

安堵するさーちゃんとがっくり肩を落とす湖桃ちゃん。
ちょうどいい時間だし、渕華さんにお茶を頼もう。

「まったくもう、お父様ときたら……」
「栄蔵さんも真っ昼間からお酒に手を出すなんて……。しかも、姉さんの所にまで行って醜態を晒すとか」
「昔の頼りがいのある凛々しい兄さんの思い出が、木っ端微塵に砕け散ったわ」

のっけから兄さんの愚痴会に。スフちゃんが音を抑える結界とかいうのを張ってくれたので、三人で会話しててもしーちゃんたちが早々起きることはない。二人の体勢はさっきのまま、あたしはミリ単位ぐらいしか動いてない。

「大丈夫なのですか、叔母上様？」
「何が？」
「そのお二方、そのままで。布団に移さなくて宜しいので？」

あたしの姿勢に無理があるんじゃないかと、心配してくれた湖桃ちゃん。しーちゃんは膝に乗っていて、白い右翼はあたしの左肩と畳に広がっている。しゅーちゃんはクマぬいぐるみの上だけど、黒い左翼はあたしの右肩に乗っかっているからだろう。

「翼に重さはないから平気。でもありがとうね、湖桃ちゃん」
「こ、湖桃、ちゃん？」

あたしが礼を述べると、口元を引きつらせる湖桃ちゃん。あれ？

「ねえ、さーちゃん、あたし変なこと言った？」
「まあ、本人が言われ慣れてませんから。湖桃の代は分家の者に年下が多かったですしねぇ」

ほぅ、と溜め息を吐くさーちゃんと、頬を染めて俯く湖桃ちゃん。なるほど、あたしたちの時は年上に男ばっかりで、年下が女ばっかりだったしなー。なんか年下の子に懐かれてた。ああ、年下筆頭といえばさーちゃんだが……。

「そうそう、さーちゃん。今はもう平気？」
「何がです？　出来れば質問には主語を入れてください、姉さん」
「え、前にさ、雷雨の晩によくあたしの部屋に来て『姉さんが怖がってないか心配d「わー！　わー！　わー！！」……」
「お、お母様？」
「『姉さん偶には一緒に寝るとか致しm「わあああああっ！？」……」

ぜひーぜひーと息が荒いさーちゃん。そこまで親が慌てるところを見るのが初めてなのか、超驚いている湖桃ちゃん。

その昔、雷が苦手だったさーちゃんは何かと理由をつけて、あたしと一緒に寝ようとしていたのだ。ガラガラドーン（三匹のヤギじゃないよ？）と音がした途端、布団に潜って生まれたての子羊のように、ぷるぷる震えていたのだ。あのころのさーちゃん、反応が面白……、いやいや、可愛いものでしたよ。

「ふ、ふふふふ……。姉さん、私に何か恨みでもあるのですか？」
「何か酷い誤解があるようだね、さーちゃん。あたしはただ、さーちゃんと過ごした思い出を湖桃ちゃんに聞かせてあげようとしてい

るだけじゃないかー」
「あ、あのー、お、お二人とも……？」

「思い出話でしたら私も負けてはいませんよ、姉さん」
「ははは、何を殺気立っているのかなあ、さーちゃん」

湖桃ちゃんがあたしたちの間に流れる何かを感じ取って、一歩下がる。近くで皿に盛った角砂糖を齧っていたスフちゃんが脱兎のごとく逃げ出した。

女女女しい（後書き）

サブタイトルは「かしましい」と読みます。

涙は女の武器です

「さーちゃんが！」「姉さんが！」とくだらない昔話で盛り上がっていると、望さんが「お客様ですよ」と取り次ぎに来た。ふと周囲を見渡してみると部屋に居る人数が足りない。

「湖桃ちゃんは？」

「先程、お戻りになりました」

どうやらあたしたちの姉妹仲に呆れてしまったようです。蔑(ないがし)ろにしてしまうとは、反省。兎も角、お客を通して貰うと静流ちゃんだった。帰宅したばかりなのか制服のまんまで部屋に来て、さーちゃんを見ると居住まいを正す。

「先代様、いらっしゃっていたのですか」

「なんですか、着替えもせずに姉さんの前へ出るなんて……」

お説教が始まりそうだったので待ったをかける。

「あたしがいいよって言ったんだよ。今の授業とか興味あったし、お説教ならあたしに頂戴」

「……ま、まぁ、姉さんがそうまで言われるのでしたら。次は身嗜みに気をつけるのですよ」

「申し訳ありません、先代様。次は留意致します」

深々とさーちゃんに頭を下げる静流ちゃん。良い子だ……。「長居をしてしまったようですね」とさーちゃんが部屋を去ると、肩を落として溜め息を吐く静流ちゃん。あたしがじーっと見ているのに気付くとぴょんと姿勢を元に戻す。

「大丈夫だよ、あたしはそんな口うるさくないから。むしろくどくど言われる立場はよく分かるし」
「はうぅぅ、ありがとうございます遥さーん」

涙目でうなだれる静流ちゃん。なんでもあたしみたいに甘やかしてくれるのは、栄蔵兄さんくらいしかいないんだとか。湖桃ちゃんもさーちゃんも三つ年上のお姉さんも、二言目には小言をくれるらしい。

いや、それはまだマシなんじゃないかな？　あたしなんて実の両親に「役立たず」だの「屑」だの「妹に劣る」だの言われたけど。ああ、なんか思い出したら涙出て来た……。

「は、遥様っ！　……って、え？」

ポロリとこぼれ落ちたあたしの涙にギョッとする静流ちゃん。ちょっと呼び方が「様」に戻ってるよ。しかし、それを注意する間もなく、あたしも違う事態に驚いた。足元と脇から強烈な光がほとばしったからだ。

しーちゃんからは白い、白くどこまでも透明な純粋な光。いつの間にか目を覚ましていたしーちゃんからほとばしった光は、溢れ出た水のように床を伝い縁側を這い、庭に到達すると大きく広がる。そこで一際輝いたかと思ったら、ゆっくりとエレベーターで上がって来るみたいな形で、鎧や剣で武装した始族の一団が現れた。

しゅーちゃんから放たれたのは黒い、夜の闇より純粋な黒。しゅーちゃんより独立した黒は空中でボールのように丸くなると、庭まで自力で飛んで行き直径に見合わない物をむりむりっと産み落とし

た。現れたのは翼の生えた真っ黒い三頭の獅子。目が赤い、口が怖い、牙が凄いと恐ろしい面構えだけど不思議と怯える怖さは感じなかった。

静流ちゃんに至ってはあたしの背中に張り付いてぷるぷる震えている。

「ぶー！」
「あーむー！」

バッサバッサと翼を大きく広げて縁側の天井付近まで飛びあがる二人。膝を付いてしーちゃんに剣を掲げる武装した始族の人たち。横に並んで大人しくなる三頭の黒い獅子、翼付き。あれも終族でいいのかなぁ？

「ちょっ！？　何の騒ぎでっしゃろか！」
「あ、スフちゃん」

さっき庭の方へ避難していたスフちゃんが慌ててすっ飛んで来て、しーちゃんたちの前に並ぶ物騒な方々を見、ピキーンと硬直する。

「し、ししし、執行部隊？！」
「しっこう……？」
「お二方が敵を排除すぅために喚び出す者の事ですえ」
「ど、何処に敵が？　敵ってなんですかっ！？」

静流ちゃんパニクり過ぎ。お陰であたしが慌てるひまがなくなっちゃったよ。

「ぶーぷ！」

「うー！」

ビシッと片手を上げ、強い口調で号令みたいなものを掛ける二人。ガシャリと鎧を鳴らす始族の騎士さんたちと、ガーオーと吼える黒獅子たち。耳を傾けていたスフちゃんがびくびくしながらあたしを見上げた。

うん？

「遥様をいじめた奴をやっつける、と言ってますえ？」

「は？　あたしがいじめられた？　いつ？」

意味がよく判らないんで首を傾げると、背後にいた静流ちゃんが「あ！」とか声を上げた。

「遥様さっき泣いてたじゃないですか！」

あー、あれ。昔の辛い思い出がね、うん、うん？

「って、原因はさっきの涙？！」

「ぷーぷー」

「むーぷー」

はっ、となってしーちゃんとしゅーちゃんを見上げると「そーそれ」とでも言うように頷いた。あー、なるほどぉ。そりゃちょっと無理な相談だーねー。

立ち上がって二人を抱き寄せる。不思議そうな瞳を向けて来るけど、抱き締めて頬を寄せ合う。

「うんうん、ありがとねー二人とも。でもねー、あたしの涙は辛い

思い出なだけで、もう昔の事なんだよー」
「ぷー？」
「むー？」
「今はしゅーちゃんもしーちゃんもいるし、さーちゃんもいる、静流ちゃんもいるし、好きな人がいっぱいいるんだ。だからあたしは大丈夫だよー」

元気、元気ーって、笑いかけると二人とも不機嫌そうな表情を一転させ、花のような笑顔に変わった。それと同時にパァーっと光を放って、始族の騎士さんたちと黒獅子も跡形もなく消える。

あたしの胸に顔をすり寄せたり、頬をぺちぺち叩く二人はもう不機嫌ではないようだ。よしよし、かぁわいいなぁ～二人とも～。出来れば今後こういう物騒な事とかとは無縁でいてもらいたいなあ。

格闘ごっこ

ひとしきり二人を抱きしめた後、静流ちゃんがあたしの部屋に来た理由を片付けよう。

「ごめんね、静流ちゃん。無理を言ったみたいで」
「いえ、大丈夫です。私もちょっと楽しみでしたし」

「ぷーぷー」
「あーむー」
「あ、ごめんね、二人ともー。静流ちゃんにちょっと教えてもらいたいことがあるんだ。静かにしている、って言うのは無理がありそうだけれど。それでよければ私の膝の上に座る？」

ちょこんと座布団に座ったしーちゃんとしゅーちゃんが何か疑問を持ったようなので聞いてみる。構って欲しいのだったら静流ちゃんには悪いけど、今日の話は延期するしかない。私が今ここに居る理由はこの二人を育てることだし。

でも聞き訳がいいのだ、この二人。それが美徳なのかそうでないのかは置いといて。

「ぷー」
「むーむー」

二人で顔を見合わせてなにやら頷き、ハイハイでてこてこ歩く。しーちゃんは茶色っぽいクマぬいぐるみを捕まえ、しゅーちゃんは黒っぽいクマぬいぐるみを手に取る。二体は二人の力――――スクちゃんによると念動力の一種らしい――――を受けてひょこっと畳の上

に立ち上がった。

まあ、あれはあれで遊園地とかでよく見かける着ぐるみのようだけど。初めてその場面を見る静流ちゃんが「ええっ！？」と驚いている。これでしーちゃんやしゅーちゃんが翼が生えているだけの赤ん坊ではない、と証明されたわけだ。静流ちゃんにとって二人は「翼が生えてるけど普通の赤ん坊」と言ってたから。

二体はゆっくり歩き対峙すると、等間隔を開けて右向きに回り出した。しいて言うならば嵐の前の静けさ、猫同士が縄張り争いをする為に相手を見据え、隙を見せないように回りだすような感じだ。

ぬいぐるみ同士だというのに部屋には緊張感が漂う。静流ちゃんもお茶を持ってきてくれた渕華さんも微動だにせず二体に視線が釘付けだ。

カーン！

不意に何処からともなくゴングを鳴らす音が響き渡った。これ幻聴じゃなくて実際にスフちゃんが鳴らした音である。みんなで同じものを見ていたからなあ、鳴らせそうなスフちゃんがこの役を買って出た。

ゴングが鳴った瞬間、短い足を俊敏に動かして二体が相手に向けて疾走する。ちゃんと体を使って走らせるあたり、しーちゃんたちも操作が徹底してる。

黒っぽいクマぬいぐるみが地を蹴って飛び、相手にフライングキ

ックを食らわせようとした瞬間、茶色っぽいクマぬいぐるみは体を低くしてキックをかわし、黒っぽいクマぬいぐるみが頭上を通過しかける前に頭を上に跳ね上げた。

当然頭上を通過中の黒っぽいクマぬいぐるみはお尻のあたりに打撃を食らい、バランスを崩して足が上、頭が下に。すかさずジャンプした茶色っぽいクマぬいぐるみが背後からおなかの辺りを掴み、そのまま落下。黒っぽいクマぬいぐるみは畳に頭をぶつけて停止する。

ダッと駆け寄ったスフちゃんが二体の前で「わーん、つー、すりー」、前足を畳でぱしぱしぱしと叩き、カウントがゼロになって勝敗が決する。ぽてんと黒っぽいクマぬいぐるみが畳にうつぶせに倒れ、茶色っぽいクマぬいぐるみは短い両腕を高々と上げる。スフちゃんの尻尾がソレに添えられて。

「始族の神子様の勝ァちですえー」
「あーうー」
「……ぷー」

同時にしーちゃんも両手を上げる。しゅーちゃんは悲しそうに俯く。あたしと渕華さんは「「わーぱちぱちぱちー」」と口と拍手で健闘を称えるの。

「……なんですかこれ……」
「あーうん。この前TVつけたら丁度プロレスがやっててねー。それを見た二人が真似し始めたの。ちょっと可愛いでしょー？」

ぽかーんと口を開けた静流ちゃんにこうなった訳を説明してあげよう。

あたしが少し席を外したときの出来事でした。その場に居た望さんが「これは見せたらまずい」とか思って慌ててチャンネルを変えたらしいんだけど。初見で興味を持った二人がチャンネル変えられて号泣しちゃったんだよ。

当然二人の号泣である、また障子やらふすまが全部飛んだ。ぬいぐるみが無事だったのが理解に苦しむところです。慌てて戻り、二人を嵐の中なだめて目を回していた望さんに理由を聞いて、プロレスを見せてあげました。

そしたら次の日からぬいぐるみ合戦が相撲からプロレスゴッコになっていたんだよね、これが。どうやらしーちゃんとしゅーちゃんが交互に勝ったり負けたりを繰り返しているのも遊びのうちらしい。

あたしも最初はただ眺めているだけだったのだが、渕華さんが言うには「健闘を称えてやった方がいい」とのこと。そうして今みたいにその場で見ていたものは拍手をする、状態になったのだ。

「ぷーぶー」
「うーあー」
「ちょっと構えなくてごめんねー二人とも」

戦い方に論議している（？）しゅーちゃんとしーちゃんの頭を優しく撫でたあたしは、静流ちゃんのところに戻ってから「よろしくね？」と頭を下げた。

「あ、はい！」

視線を合わせたらどちらかともなく吹き出しちゃったよ。

格闘ごっこ（後書き）

静流ちゃんが部屋まで来た理由が伸びる伸びる。

勉強をしよう

うーん、ようやっと本題に入れるわ。今回わざわざ静流ちゃんに来て貰った理由は勉強のため。あたし自身勉強はそんな好きじゃないんだけど、五十年後の勉強方法とか興味あるじゃない？　そんな訳で頼んだんだけど、静流ちゃんも習い事とかあるので、あたしの所へ頻繁に顔を出す訳にもいかないし。

しかし、五十年経っても勉強方法は変わらないのね。教科書とノート、やはり書いて覚えろと言うことかー。

でも教科書が薄い……。紙っていうか、セロファンみたいなペラッペラで極薄な紙？　昔より重さも厚さも半分だー。

あたしの最終学歴は高等部二年頭なので、何処まで習ったか分かり易い数学を教えて貰うことに。ノートは前もって望さんが用意してくれました。しーちゃんとしゅーちゃんも欲しがったので、同じモノを。

ちなみに最初は、書くものが欲しいのかとあたしも望さんも渕華さんも思ってたんですよ。スケッチブックとクレヨンをあげたら、ペイッと放り投げられました。それでべそをかきはじめたんで、まったく同じノートを渡したら喜んでくれました。こ、こええええ……。

あたしがノート広げて静流ちゃんと勉強始めても、一度こちらを見に来てノートとあたしの顔を交互に見たら、また遊びに戻っちゃった。同じ物を欲しがったからといっても、書きものをするためじゃないらしいです。何に使うのか疑問が残りますね。

教わりながら色々聞いたんだけど、静流ちゃんの学校は中高一貫になってて、前後学期に変わっているそうな。だから静流ちゃんは今五年生であると。

「とりあえず、もう少し進んだら前期の中間テストでもやりましょう」

「ええー、もう？」

「私も一応、お婆様に報告の義務がありますので。いつか通る道と諦めて下さい」

又姪がスパルタでごわす。神様たぁすけてええええええっ！

「うぅー、むいっ！」

ぐわしっ！

「……」

「……」

「……は、遥、さん」

「……うん、なぁに？」

「……私、どうなるんでしょうか……」

「ええと……」

ありのままに今起こった事を話すわ。あたしが心の叫びをあげた途端に、しーちゃん操る茶色っぽいクマぬいぐるみが両手で静流ち

ゃんの頭を後ろからがっちり掴みました。

「こ、こらーしゅーちゃん。静流ちゃんはあたしの先生なんだから邪魔をしちゃだめだよー」

注意したらぽかっと離しましたが、いったいどーしたのやら……。

「むーむっ！」

「助けを求められた気がするーっちゅう、言うとりますえ」

「はい？」

すかさず間に入ったスフちゃんが通訳してくれた。当人は何故か黒っぽいクマぬいぐるみに抱えられている。プロレスごっこじゃなかったの？

「はっ！？　もしかしてあたしの心の叫びを察知、し……て……」

「はぁ～るぅ～かぁ～さぁ～んんん」

怖いっ！　怖いよ、静流ちゃん！　目を三角にするなんて、常人には無理だから！

「何を叫んだんですかぁ？」

「や、静流ちゃんがね、スパルタっぽくてね、そいで、つい、あうたーごっとにヘルプミー、……と」

「……」

「……」

ち、沈黙が痛いっ！？

「分かりました」
「あ、分かってくれた？」
「中間テストをすっ飛ばしまして、前期末テストをやりましょう！」
「えええええええっ！？」
「スパルタなら当然ですよね！」
「うわあああん！　ごめんなさい静流ちゃん、ちょっ、勘弁して！」

「大丈夫ですよ」
「ゑ？」
「ほんの三十ページぐらいですから」
「上げて落とすっ？！」

くち……、じゃなくて、心の叫びは災いの元。しーちゃんの馬鹿あああああっ！

「むー？」（←聞こえていない）

勉強をしよう（後書き）

高校二年って何習ったのか、もう記憶にない……。

ワイルド襲来

あれから、なんか間を置かず静流ちゃんが来て、一日一教科スパルタテスト方式がああぁぁ〜！

国語と歴史なんか二時間教科書熟読のみでいきなりテストですよ、テスト……。え？『教科書を読めば答えは書いてある』？　それは秀才の屁理屈って言うのよ！

あぅあぅ、泣く797なうぐいす田村麻呂、白紙894から始める遣唐使、人1混み053行列鳳凰堂、以後予算増える1543種子島、と。んなに沢山覚えられませんってば……。は？　物理と化学？　なにそれ美味しいの？

しかもなんか採点した後に眉をひそめてふかぁ〜い溜め息を吐くのは何っ！？　明かされてないけど、そんなに酷い点数なの？

一通り済ませると真っ白さ……。ふふふ、テストと言うものはこんな短期間で詰め込むものじゃないと思うよ、絶対。

「むーうー」
「ぷーくー」
「はいはい……」

机に突っ伏してダレていると、しーちゃんとしゅーちゃんが普段（ゆか）着の裾（た）を引っ張って、構って攻撃を。迂闊に潰れてもいられないのだ。世のお母さんも大変だと身にしみる思いですよ。現在進行中で他人事ではないけどね！

両手を繋いで「せっせっせー」とかやってたら、ふと縁側までハイハイしていったしゅーちゃんが、じーっと空を見上げていた。

「しゅーちゃん」

「むぃ」

あたしが呼ぶのとしーちゃんが「お前の番だよー」みたいに翼でおいでおいでをする。……器用な翼だよね、いつ見ても。

「しゅうちゃーん」

「ぷ」

もう一度呼ぶと振り向いてくれるだけで、また空を見上げちゃった。空に何かあるのかな？

「にぃ？！」

しーちゃんを抱きかかえて縁側まで出ると、しゅーちゃんが見上げている方向は西。例の空が割れてエメラルドグリーンが広がる場所だ。同じくあたしの足元まで出て来たスフちゃんが、翼と毛を逆立ててぴょんと跳ねた。

「どうしたのスフちゃん？」

「こ、この波動は……」

「？」

「むぷ！」

一瞬空から視線を外し、しーちゃんが上げた声に視線を空に向けようとした瞬間、爆発的に目も開けてられないような轟風が吹き荒

れました。
「きゃっ！？」
「「むぷいっ！！」」
二人がなんかしたらしくそよ風に変わったけど。びっくりしt……。
「……れ？」
「よお坊ン、ハルカも元気そうじゃねぇか」
「ぷーぷぃっ！」
十二枚の真っ黒い翼を広げたサタンさんが立っていた。あの一瞬で点も見えないような空の向こうからここまで来たみたいね。どんなスピードですかっ！？
相っ変わらず全身黒レザーにメタルな人だなあ。ギター持たせたら、ただのミュージシャンにしか見えん。
「あぁん？　別にヘーキじゃねえか」
「ぷーぶー！」
「無事だったんだから固いこたァ言うなよ。なぁハルカ？」
「すみません。会話の主軸すら分かりません」
しゅーちゃんをひょいと抱き上げて、高い高いをしながら話してる。意味の分からない会話をあたしに振らないで下さい。お茶を頼もうと後ろを振り返ったら、渕華さんが目を回して倒れていた。……さっきの暴風の影響かな？
「じゃないっ！　ちょっ、渕華さーん！」

慌てて駆け寄って助け起こすも、本人は「ふにゃふにゃ」言うくらいで反応がおかしい。

「あ、ワリィ。それ俺の影響だ」

「なにそれええええっ！？」

スフちゃんが言うには、サタンさんが持つ高密度の神力みたいなものが人体に悪影響を及ぼして、一時的に酒に酔ったような状態になっているそうだ。

「……つまり、急性アルコール中毒！？」

「害は無いとですえ」

「ちょっとサタンさん、その波動を収めてーっ！」

「だが断る！」

「そんな酷ぉい」

「いえ、あの状態でサタンの旦那は最小になっとるとですわ」

「普段どんだけの毒性よっ？！」

厨房覗いたら望さんも目を回していたんで、本家に隔離させておこう。あっちはひっくり返ってる人が居なかったので、使用人の人達に渕華さんと望さんを託すと、離れに接近禁止令を出しておいた。

ワイルド襲来（後書き）

年号云々はうろ覚えですが、間違っていても主人公の認識と言うことで訂正しません。歴史は赤点だった作者です。

鎌倉幕府が今は違うと言うので削除しました。

猫、帰る？

使用人がダウンしちゃいましたので、自分でお茶を用意する。お茶請けがどこにあるか分からないので、飲み物だけですが。でもサタンさんにはお酒の方がいいのかな？

「うぷー」
「むい」
「ありゃ？」

お茶持って部屋まで戻ってみれば、二人がクマぬいぐるみを盾にサタンさんを警戒してた。何かの遊び？　スフちゃんは縁側で、離れ以外にサタンさんの影響が及ばないように結界を張っているらしい。ご苦労様ですよ。

「はい、サタンさん。お茶ですけど……」
「おお、すまねぇなハルカ」
「お酒が何処にあるか分からないので、心苦しいのですが」
「ハルカの中で俺の認識ってどうなってんだよ？」

笑って誤魔化しておく。そんな認識なんて、ねぇ？

「なんの遊び？」
「ぷいっ」
「あーぶ」

仁王立ちするクマぬいぐるみの背に隠れたしゅーちゃんとしーち

ゃんが首を横に振る。否定？　じゃあ遊びと違うってことかな？

「どうかしたんですか？」

「いや、たまには帰郷しねえか、って聞いたんだけどな。見事に拒絶されちまったぜ」

ＨＡＨＡＨＡＨＡ！　とかアメコミみたいな笑い方しないでください。違和感……は無いけど、逆に怪しさ抜群ですよ。でも、そっか。帰郷かあ……。そうだよね、しゅーちゃんもしーちゃんも本来のお家があるもんね。

「ぷーぷー！」

「あーむぃー！」

「ってわっ！？」

感慨にふけってたら、翼を開いた二人に飛びつかれました。浴衣をしっかりと掴んで「いやいや」するみたいに首を振ってる。あはは、これは故郷より好かれているところに嬉しさを感じていいのかなぁ？

「チッ、フラレちまったようだな。ずいぶんと懐かれたモンじゃねえか」

ドスの効いた声色で楽しそうな顔しないで下さい。どこぞの悪人みたいですから。まあ、強引に連れ戻しに来たって感じじゃないですねー。

「おっと、忘れてたぜ。ほれ、ハルカ」

前後の脈絡もなく、サタンさんがポイと何かを放り投げる。あた

しが慌ててキャッチすると、それはカチューシャだった。右側に黒い翼、左側に白い翼を模したアクセサリーみたいなのがくっついてる。羽根は本物みたいにふわふわだね。

「なんですか、これ」

「ここではガン見は一聞にしかずと言うんだったか？　つけてみろや」

「〝百聞は一見にしかず〟ですよ」

激しく間違ってますってば。特に気にせず、言われるがままに頭に着ける。

「ぷーぷぃ」

「半分おそろい？　半分ずつね……、あれ？」

あたしの右側を指差したしゅーちゃんが何となくそう言ったような気が……。

「しーちゃんしーちゃん、これどう思う？」

「むーぷー」

「両方白ければ良いのに？」

おー。なに言ってるか判る。意訳って程度には分かるという感じだけど。　なんという素敵アイテムか。感動して二人をぎゅーっと抱き締める。あ、苦しい？　あはは、ごめんね。

「どうだ？」

「すごく嬉しいです。ありがとうございます！」

「そうか、よし。じゃあスフインクスが居なくても大丈夫だな」

「……え？」

猫、帰る？（後書き）

スフちゃんの食事は角砂糖山盛り。

不老不死の代金に

「ええっ！　スフちゃん帰っちゃうの！？」

あれ？　スフちゃんって偉い人との繋ぎ役で居るんじゃなかったっけ？　首を傾げたあたしの前で、サタンさんが縁側にいたスフちゃんをひょいと摘み上げる。

「坊ンと話せるなら俺らと繋ぎ取れんだろう？」
「ぷぅ」
「むぃ」

任せて？　いや、でもさあ……。

「スフちゃんは帰るのに賛成なの？」
「わちは旦那が戻れっちゅうんなら従います」
「いやそうじゃなくて、スフちゃんの意志は？」
「偉い人に従いますぅ」

身も蓋もない？！　サタンさんはスフちゃんぶら下げながらニヤニヤと何か企んでる顔だし。ど、どうしよう……。んーと、えーと。

悩むのも面倒になったので、サタンさんの魔の手からスフちゃんをしゅばっと奪い返した。

「お？」
「ぷ！」
「ほえ？」
「う？」

しゅーちゃんとしーちゃんを抱いたままだったんで、一旦離してからスフちゃんを胸に抱え込む。二人は翼を広げ、あたしの左右に滞空してる。何故か超笑顔。

「おいおいハルカ。俺らの決定に異を唱えるのか？」

サタンさんの顔付きが真面目で緊張感をはらんだものに変わる。あたしも冷や汗がだらだらと流れていくような気分を味わっている。超怖っ！

……でも、後悔は後で。

「す、スフちゃんはもうこの部屋の一員なんです！　ちゃんと寝床だってあるし、渕華さんたちがスフちゃんの好物を常備してるしっ……」

「ほう？　だけどそいつは始族で決定権はルシフェルにあるんだぜぇ。アイツが怒ると、……怖いってもんじゃねえぜ」

うぅ、ますます重圧が深まった感じになったよぉ。しーちゃんとしゅーちゃんもあたしを挟むようにサタンさんと対峙してくれる。

「スフちゃんが自分の身の振り方を決めないって言うんならあたしが決めます。ここに居て欲しい」

「……ほう、ならハルカ、覚悟は出来てるんだろうなァ？」

「ぷい」

「むー」

「決めましたから！」

あたしがそうはっきり口にした途端、サタンさんの殺気にまみれ

た気配が霧散する。本人はさっきまでの緊張感などなかったかのように苦笑した。あ、あれ？

「じゃ、スフインクス。残留ってことだそうなんで、この先も頼まア」

「にゃぁ、はいはいですえ」

「ぷいぷぃ」

「あむ」

え、あれれ、なにこの状況？　あたし反対されてたんじゃないの？　なんでしーちゃんもしゅーちゃんもスフちゃんも通常運転なの？　当然なの？

「おいおい、ハルカが状況分かってねえぞ。スフインクスが説明したんじゃねえのか？」

「はあ？」

えーと、スフちゃんの説明？

「あーぶぷ」

「うーぶ」

「え？　しゅーちゃんたちと同じ？」

はーっと大袈裟な溜め息を吐いたサタンさんがあたしをびしっと指差した。

「坊（ボ）ンと同じような立場だと伝えた筈だぜ。つまり、ハルカの決定は終族始族に関係なく従うモンなんだよ。お前が白っつったら、黒くってもそれは白なんだ。肝に命じとけよ」

……いや、ちょっと待って……。

「責任重大じゃないですかーっ！！」

「だから言ってるだろーが」

「えええええっ！？」

なにその柚木果狩の一族を束ねるより重要な役職っ！？

絶句したあたしの肩を左右からしーちゃんとしゅーちゃんがポンポンと叩いてきた。おそろい？　むしろ恐ろしいわっ！

「じゃ、用事は済んだし帰るか」

アデュー、と捨てゼリフを残したサタンさんは、ばっびゅーんと跡形もなく消えた。いや、飛んでったのか？　前後の脈絡なく行動しないでください。実態が掴みにくい性格してるなあ、あの人。いや、人じゃないけどね。

不老不死の代金に（後書き）

振動を感知して止まる遠赤外線ヒーターを購入したのですが、側を通った振動で止まるほどの柔肌なのはいかがなものか……。

ここまでの登場人物

☆柚木果狩（ゆずきかがり）　遥（はるか）

主人公その1。外見年齢十七歳、実年齢六十七歳。
神の種酒（ソーマ）という素敵アイテムによって不老不死の身となった為、始族&終族の神子（みこ）の乳母役に抜擢された。柚木果狩家でも珍しい異能持ちで、それ以外は平均的な一般人（？）。

☆しーちゃん

主人公その2。白い翼を一対二枚持つ、始族の神子。ツンデレ。口癖は「む」

☆しゅーちゃん

主人公その3。黒い翼を一対二枚持つ、終族の神子。そこそこ甘えたがり。口癖は「ぷ」
しーちゃんもそうだが、未だに素っ裸にオムツのみ。

☆スフインクス

始族所属で白と黒の翼を持つ半端者。見た目は鼻の部分が白いだけの青い子猫。角砂糖が好き。
遥の決断により家族の一員に加わった。

☆ルシフェル

始族代表を務める白い翼を六対十二枚持つ麗人。礼儀正しい。

☆サタン
終族代表を務める黒い翼を六対十二枚持つ、ワイルド系のハンサム。かなり適当で生きてる人。

★柚木果狩（ゆずきかがり）　沙霧（さぎり）
遥の実妹でキチンと年をとった六十六歳のお婆ちゃん。自分にも他人にも厳しいが姉だけは別。
先代の柚木果狩家当主。

★柚木果狩（ゆずきかがり）　栄蔵（えいぞう）
沙霧の夫、六十九歳。かつては姉妹どちらかが当主を受け継ぐ時の夫候補だった。

★柚木果狩（ゆずきかがり）　静流（しずる）
遥のお側役に任命された沙霧の孫、遥の又姪に当たる。今代当主湖桃（こもも）の次女で十七歳。

★望さん
本名、鞍町（くらまち）　望（のぞむ）、二十三歳。柚木果狩の分家筋、鞍町家の次女。遥専属の使用人その1。主に掃除洗濯お世話担当。

★渕華さん

本名、薬師寺（やくしじ）　渕華（えんか）、二十二歳。上に同じく分家筋、薬師寺家の三女。遥の使用人その2。主に食事担当。

（※注：★＝人間。☆＝人外）

ここまでの登場人物（後書き）

まだ部屋から一歩も出てはいない主人公。

散歩道・本家？

「お散歩に行こう！」

「ぷ？」

「う？」

いやいや、しーちゃん、パンの絵が描いてあっても絵本は食べるものじゃないから、かじらないの。しゅーちゃんも、なにクマぬいぐるみを毛布で簀巻きにしてるの？　可哀想だから止めようね。

気が付いたんだけど、あたし離れに住み始めてから、今まで一歩も外出てないのよね。これって引き篭もりよ。引き篭もり以外の何者でもないわ。

……と言う訳で、外に出るにあたって。

「二人ともお洋服を着ようね？」

「ぷーぷ！」

「あ～む！」

嫌ですか、そうですか……。んなに頭が残像になるくらい首を振らなくてもいいじゃないのさ。

「じゃあ本家をぐるりと回るかなぁ。スフちゃんも来る？」

「構わんとーですにゃあよ」

「……」

いや、スフちゃんや。なんで頭から尻尾までカラフルなリボンまみれになっているの？　なんで語尾に『にゃ』をつけるの？　その後ろで「きゃ～」とか悶えている渕華さんは何？

なんか最近は渕華さんと望さんに、文字通り猫可愛がりされてるし。見た目子猫だから構いたくなる気持ちも分かるよ。しーちゃんたちみたいに抱いていても気分悪くならないし。

あたしが一度「ふかふか～」とか撫でてたら、しゅーちゃんとしーちゃんがふてくされちゃったんだ。お陰で一日中二人の髪の毛を「ふかふか～さらさら～」と撫で回す羽目に……。翌日、筋肉痛で腕が上がらなかったけど。

とりあえず本屋敷の周りを囲む外側の廊下をぐるりと回ってこよう。屋敷自体が大きいから、ゆっくり歩けば十分か十五分くらいの散歩にはなるでしょう。たぶん。

実際の所、住んでいる身としては色々時間が掛かるのよ、この家。学校に行くとき――体の事もあったから車通学だったけど――家から出て門まで行くのに時間が掛かって、門から丘を下って行くのも大変だったし。一番大変だったのは帰りだけど、何回階段を上るのに挫折したことか……。

念の為、ハンカチやオムツやタオルを入れた手提げバッグを望さんが持って、総勢五人となったあたしたちは本屋敷へ向かう。渕華さんはお留守番です。

しかし、実は今の季節十二月なんだけど。寒風吹きすさぶ中、本家外側一周なんて人だった時は苦行でした。そんな理由で望さんは待っててもよかったんですけど。本人的には「これもお役目ですか

ら」との事。あたしたちは暑さ寒さはあんまり気にならないから大丈夫なんだけどね。

「う～」

「はいはい、抱っこね」

しゅーちゃんはあたしの腕の中、ぱたぱた羽ばたいたしーちゃんは頭の上へ。これ、鴨居とかに当たらないかな？　スフちゃんは半歩後ろをトコトコと、その後に望さん。

「んじゃ、しゅっぱ～つ」

「むーむー」

「うぷぃ」

「遥様、気をつけてくださいね」

うん、頭上は気をつけるよ。

散歩道・本家？（後書き）

この前に幕間2を入れる予定だったのですが、予想外に暗い話になったのでカット。でも本当の理由は病床でメモ用紙に殴り書きしたので、自分でも解読不能な文章になっていました。この本家編も解読しながらです。

散歩道・本家？

本屋敷に続く渡り廊下。ここは下に、下生えの熊笹に隠れて小川が流れています。これは本屋敷庭にある池からなんだけど、このまま裏を回ってまた表門まで出て、麓まで続く階段脇を流れて行ってるの。

小さい時は御婆様に教えて貰った笹舟を浮かべて、さーちゃんとどっちの笹舟が早く表門まで辿り着くか、って遊んでたね。静流ちゃんの代はそういう遊びはしなかったのかな？　また会った時に聞いてみよう。

「ぷぃぷ？」
「うん、ちょっと懐かしくてね」

ちょろちょろ流れている小川の流れを見てたら、しゅーちゃんに心配されちゃった。頭に乗ったしーちゃんが、同じように下を覗き込んでいる。落ちる……ことはないだろうけど、危うい感じにも見えるから止めさせよう。

「二人共もう少し大きくなったら、ここでの遊びを教えてあげるね」
「「う？」」
「泳ぐんでっしゃろか？」

スフちゃんも一緒になって首を傾げた。ぷっ、と望さんが噴き出して肩を震わせてる。あたしの部屋なら大っぴらに笑えるんだけど、本家の人たちって礼儀作法五月蠅いからねー。「使用人が慎ましく

出来なくてどうしますか」とか怒られるの。

昔はよく見たけど、今はどうだろうね？

渡り廊下を終えて本屋敷の表側から左回りに行こうか、裏から右回りに行こうか迷う。裏庭はたしか、あたしの記憶のままだと枯れ山水になってたけど……。

「望さん望さん」

「はい、どうしました？」

「裏庭ってまだ枯れ山水がありますか？」

「はい、御婆様の話によると、庭のレイアウトは五十年前と大して違いはないそうです」

裏庭の枯れ山水は結構好きだったので、先にそっちから回ろうか。なにやら先導役になって前に出たスフちゃんに「左ね」と告げてから進む。

数歩も行かない内に、前からお膳を重ねて持った使用人の女性が廊下の角を曲がってきた。あたしたちを見るなり盛大に顔を引きつらせて外側の端に寄り、自分の左側に重ねたお膳を置くと、床に擦り付けるように頭を下げる。

いやいやいや、ちょっと待ってナニソノ反応？！　傷付くわ～。って言うか、そーゆー礼は当主とか先代様とか用でしょう。前はちょっと寄って会釈するくらいだったのにどうなってんの？

「望さん？」

「はい」

「本家であたしの扱いってどうなってるんです？」
「実に今のようなかと……」
「ぷい」
「むぁ」

「偉いの」じゃありません。
偉くないから、始族とか終族とかじゃないからここは。本家直系とすれば偉いかもだけど、本家に対して何の貢献もしてないよね、あたしは……。

散歩道・本家？（後書き）

本家の屋敷は平安時代の貴族のお屋敷みたいなのをイメージしてもらえれば。

散歩道・本家？

気を取り直して散歩散歩。

裏庭には廊下に沿って横に続く、岩と砂と砂利と、点在する松の木。うーん、これこれ。この物悲しいような感じがなんか好きなのよねー。よく、さーちゃんには「年寄り臭いですよ」とか言われてたけど、今はもう年齢的には年寄りだから何の問題もないよね！

でもあたしもややこしいな、この現状って。

履歴書とか書くことがあれば、どうやって書き込めばいいのかなあ？　『〇〇年高校中退』まではいいとして、その後に『～〇〇年コールドスリープ』とか書いたら噴き出されそうだよね。

まあ、ぼんやりしながら眺めて考え事をするのは昔の定番でしたが、今はそんな事も中々出来ないと断言しよう。

「こらこらしーちゃん！　砂をかき混ぜようとしないの！　しゅーちゃんもそっち行っちゃダメでしょ！」

ちょっとぼんやりしようとしたら、二人ともあたしの所から飛び出しちゃって。砂の上で羽ばたくわ、手を突っ込もうとするわ。こっち側から注意すれば松をむしろうとするわ、砂に座ろうとかするわで、悪戯っ子にも程がある。

たぶん、あたしがぼんやりしているのが嫌なのらしい。二回も注

意したら満面の笑顔で戻って来るし。

「これで綺麗な風景なんだから、弄ったらダメだよ二人とも」
「ぷー」
「むー！」
「遊ぶ所じゃないの。見るだけの所なのよ。二人もテレビ見ていて、いきなり消されたり、チャンネル変えられたら嫌でしょう？」
「あぅ」
「うー」
「作った人から見れば、苦労が台無しにされるんだよ。自分がされて嫌な事は他の人も嫌なんだからね。だから弄るのはダメ、分かった？」
「ぷぃ」
「むー」

しゅんとうなだれちゃった。ちょっと例えが変かもだけど、やって良いことと悪いことは教えておかなくっちゃね。始族や終族の庭に枯れ山水があるかは疑問だけど。

「相変わらず遥様は凄い人やんなァ」
「凄くない凄くない。スフちゃんもここは入らないようにね？」
「分かってますえ。坊ン様方みたいに遥様に怒らーれたくはのうですから」

あたしにしがみつく二人の頭を撫でり撫でりして落ち着かせる。しゅーちゃんもしーちゃんも翼を小さくして腕の中。下から見上げてくるあどけない瞳。ううっ、この目に弱いんだよね～、何でも許せる気がしてさー。

「えこしゃん！」

「は？」

舌足らずな声と共に背後から軽い足音がして、屋内へ続いている廊下より小さな子供がこっちへやって来た。上下繋がった幼児服に涎掛けを首から下げて、目を輝かせている二歳か三歳の男……の子？　本家にいるって事は直系に連なる子でしょう。なんとなく見た目からして、さーちゃんの孫かそこらかな？

もう一度「えこしゃん」と言うと、スフちゃんに近付いた。あたしとその子を交互に見て「どうしまっしょ？」とか聞いてくるスフちゃん。「いいんじゃない？」と返すと、おずおずと手を出したその子に体を擦り付けるスフちゃん。

ぱあっと満面の笑みを浮かべたその子は床にぺたんと座り込み、スフちゃんの頭や背をペタペタと撫で回す。あたしのほうなぞまったく眼中にないという様子。さすが子供、視野狭窄ですねー。

「まあ、かなえ様！」

「え？　望さん、この子知ってるの？」

あたしの後ろで、望さんが目を丸くしてびっくりしてた。

散歩道・本家？（後書き）

エコと言えば「D」。
それにしても、この編の一話毎は短すぎるかな？

散歩道・本家？

どうやらこの子は「かなえ」くんと言って、さーちゃんの息子さんの末息子らしい。この子以外にも十代の息子さんと娘さんがいると聞く。ええと、たしか湖桃（こもも）ちゃんの弟で隆文（たかふみ）くん……、だったっけ？　あたしがコールドスリープから目覚めたときに診察してくれた病院は、その子が経営する所だったとか。

やばい、あの時しーちゃんとしゅーちゃんを引き剥がそうとしたSPの人たちが吹き飛んでたんだっけ。院内に余計な混乱を呼んでないといいんだけど……。

記憶から黒歴史として封印しようと思って、気にするのをやめる。思案してたら、浴衣の裾をくいくいと引っ張られているのに気が付いた。下を見ると、そのかなえくんが期待に満ちた目であたしを見上げている。

「えーと、どうしたの？」
「とりしゃん！」
「と、とりぃ？　……あ、しーちゃんか」
「むぃっぷ！」

どうやらしーちゃんの白い翼を見て、鳥だと思ったらしい。鳥に間違えられた本人は「とりじゃないもん！」とぷんぷん怒っている。その仕草もかわいいけど。でもしゅーちゃんの翼はどう見えるんだろう？　カラス？

「このような所でどうなされたのですか、かなえ様？」
「えこしゃん！　とりしゃん！」

「いやあのう、望さん？　こんな小さい子にその質問は答えられないでしょ」
「ぷうい」
「しゅーちゃんやしーちゃんの言葉は、あたしかスフちゃんくらいしか分からないって」
「まァ、遥様は特別でおますしの」

ううん、これでも一般人を自負。……したかったんだけど、この状況じゃ流石に無理だよねー。

かなえくんはあたしの足元でぴょんぴょん飛び跳ねながら、「とりしゃんとりしゃん」と繰り返している。うん、もしかしなくても触りたいんだろうけど、触れないのよねぇ。翼を小さくしてるといっても、先端はあたしの肩を覆うくらいだ。ある程度まで成長すれば、翼を視認できなくする術も自覚して使えるのだとスフちゃんが言っていた。ちっちゃい翼でもあるとかわいいよね、お遊戯会の演目みたいで。

床に腰を下ろすようにして、翼が何とか届く位置まで姿勢を下げる。あたしの横にトコトコと移動したかなえくんはしーちゃんの翼に手を伸ばすが、スカスカとその手は空を切るばかり。キョトンとした顔で今度はしゅーちゃんの翼に手を伸ばすが、それも掴めない。な、泣いちゃわないかな？

「ぷー」

あたしの腕の中からしゅーちゃんが手を伸ばし、翼を掴めないか

なえくんの手と合わさる。動きを止めるかなえくん。しばし見つめあった後、両者とも目じりを下げてへにゃーんと笑う。

「あ、友情が育まれた。しーちゃんは？」

「むー」

「『ヤ』って……」

さすがしーちゃん。自分が興味ないことはしゅーちゃんに同調しようともしないわ。学校行かせたら通信簿の備考欄に『協調性に欠ける』とか書かれそうだ。

しゅーちゃんがあたしの腕から抜け出して、かなえくんと廊下で向き合い手を合わせたまま上下運動を繰り返す。これはいったいどういう遊びなんだろうか？　まあ、二人とも楽しそうなのはいいんだけどね、ここは十二月の寒風吹きすさぶ廊下なんだよ。いくら子供が体温高いからって、この状況はちょっと可哀想だわ。

「はいはい、ここは寒いからかなえくんはちょっとごめんね～」

「ねーひゃん？」

「ぷぷい」

廊下からひょいと持ち上げ、腕に抱え込む。しゅーちゃんは翼で飛び上がって反対側の腕の中にすとんと。……赤ん坊二人に幼児一人ってちょっと重い、気がする。一瞬重いと思ったけど、次の瞬間にはそんな気がしただけに。重力操作か、瞬間的な筋力ＵＰでもしているのか、あたしの肉体は？

「むー」「ぷい」「なー」

頭の上と腕の中で意味の分からない会話をしないで頂きたい。さて、どうしよう？

「かなえくんは流石に一人でうろついていた、って訳じゃないですよね？」

「ええ、隆文様は本家から出ていますし。おそらくは隆文様ご夫妻が先代様か当主様に用事があり、その間かなえ様を使用人に預けていた、と言うことではないでしょうか？」

「見失ったら、その人怒られますよね……」

望さんが考えながら推論を述べた。だいたいこの状況ってそんなもんだよね。しかしこの年代の子供を見失うのかぁ……。こりゃ、しゅーちゃんとしーちゃんがこのくらいになったらちょいと気をつける必要がありそうだね。

「遥様」

「ん、どうしたのスフちゃん？」

「小ィさくその子供を呼ぶ声がしますえ」

耳をぴくぴくと動かしたスフちゃんが問題の使用人を見つけたようだ。ちなみにあたしにも望さんにもなにも聞こえていない。始族の超感覚すごーい。

「それはまあ確かに。居なくなった事を誰かに知られたら重大問題ですね。遥様に見つかっているので、時既に遅しですが」

「そんなに望さんはあたしを密告者にしたいんですかぁ？」

淡々と言っても顔が笑っていますよ望さん。スフちゃんがこっちに近付いてくるというので、その場でぼーっと待っていることにする。そしたらあたしたちが来た方向、後ろからそろーりそろーりと

角を曲がって「かなえさまー、どこですかー？」と口元に手を立てて小さい声で探し回る使用人の女性がやって来た。

「幾留（いくる）？」

「あ、望ちゃ……」

そりゃ分家の子息子女で構成されている使用人ですから、望さん知っているよね。そしてその人は並び立つあたしを見た瞬間、この世の終わりのような顔をして凍りついた。

散歩道・本家？（後書き）

全然進まない散歩だなあ……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6690t/

始まりと終わりの子守唄

2011年12月7日12時39分発行